

国際帝国主義の侵略反革命・第三世界支配を粉碎し、全世界の帝国主義を打倒せよ！世界プロレタリア革命—世界プロレタリア独裁—共産主義を実現する新しいインターナショナル（世界単一党）を国際階級闘争の最前線に創建せよ！

争奪の内容

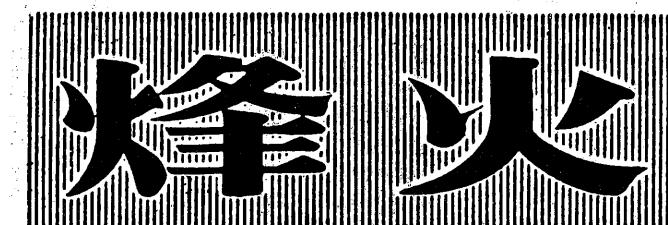
## 95年党建設基調

.....P2~13

### 12月アジア共同行動報告

.....P14~20

1995年  
1月1日  
第474号  
編集発行人 海路 薫  
一部 400円



## 共産主義者同盟（全国委員会）

■ 大阪戦旗社 大阪市北区本庄西2-8-19  
明豊ビル401号 大労協内  
TEL.(06)371-3706  
○郵便振替 00930-0-63333  
○銀行口座 第一勧銀 551-1058150



# ・95年新年号論文

## 新たな世界の現実に立つ 革命的綱領を獲得しよう

全国のたかう労働者人民のみなさん。われわれ共産主義者同盟（全国委員会）はここに九五年新年号論文（九五年党建設基調）を提起する。すべての先進的活動家・労働者・学生が、この九五年党建設基調に結集し、われわれとともに九五年を共産主義運動の一大飛躍の年としてたたかい抜くことを呼びかける。

### ■第一章

#### いかなる時代を迎えてじるのか

古い共産主義（スターリン主義）が音を立てて崩壊し続いている。スターリン主義の破産は、八九年の「東欧社会主義」の崩壊をもたらし、九一年にはソ連邦の解体をみちびいた。そしてこの動きは、さまざまな形をとって現在もなお継続している。

スターリン主義に支配された古い共産主義運動の、六〇年以上続いた一時代がいま終わろうとしている。スターリン主義こそ、一九一七年のロシア社会主義革命の歴史的な成果を破壊し、ボルシェビキ党を変質させ、世界のプロレタリアート人民の利益を裏切り続けてきた張本人であつた。それは一国社会主義路線と生産力主義という二つの根幹的な誤りによって、国際共産主義運動を歪曲し崩壊させた元凶である。

スターリン主義の潮流はレーニン主義があつたとする主張が、今日、一定の力をえている。

それは歴史のねつ造であり暴論である。スターリン主義とレーニン主義とは、まったく対立する相いれない二つの路線であり、スターリン主義はレーニン主義の打倒のうえに登場した反プロレタリア的な路線である。

スターリン主義に安住するもの、スターリン主義に対する批判を拒否するものは、その実態

の大小にかかわらず、すべて自己解体や右翼的変質の道を歩むことは必至である。中国共産党、朝鮮労働党しかり、また東欧諸国の旧共産党、先進資本主義諸国の共産党しかりである。

問題はこうしたスターリン主義の崩壊という事態が、ブルジョアジーの側からの大規模な思

想宣伝にも規定されて、プロレタリアート人民の側の社会主義・共産主義に対する懷疑や絶望を増大させているという点にある。スターリン主義に対する永遠の反対派であるトロツキズムにはもとより、第三世界の革命運動において大きな影響を与えてきた毛沢東主義にも、このような現実を打ち破る力はない。一国社会主義路線というスターリン主義と共通の基盤を有す毛沢東主義は、今日、第三世界革命運動に対する指導路線としての位置をも急速に低下しながら、新しい時代に対応できずに混迷を深めている。

スターリン主義の破産と誤りを突破する主体が現実世界において、はつきりとした形をとて立ち現れるためには、全世界の共産主義者の苦闘の一時代を必要とする。しかしながら、これを可能とする客観的条件は、この困難な一時代の最深部から着実に成熟していっているのである。

### 行きづまる資本主義世界

古い共産主義運動が崩壊し続ける他方で、二〇世紀末の資本主義は、その全面的な矛盾を世界的規模で現出させていている。われわれは資本主義という一つの歴史的な生産様式が今日、世紀末的な行きづまり状況を示していくことらえる。

資本主義的生産様式は、資本家階級による生産手段の所有に基づき、資本・労働関係を基本的な生産関係とする生産様式である。この生産様式のもとにおいては、商品の生産が支配的・一般的な生産の形態となっており、商品生産を行うのに必要な生産手段を独占的に所有

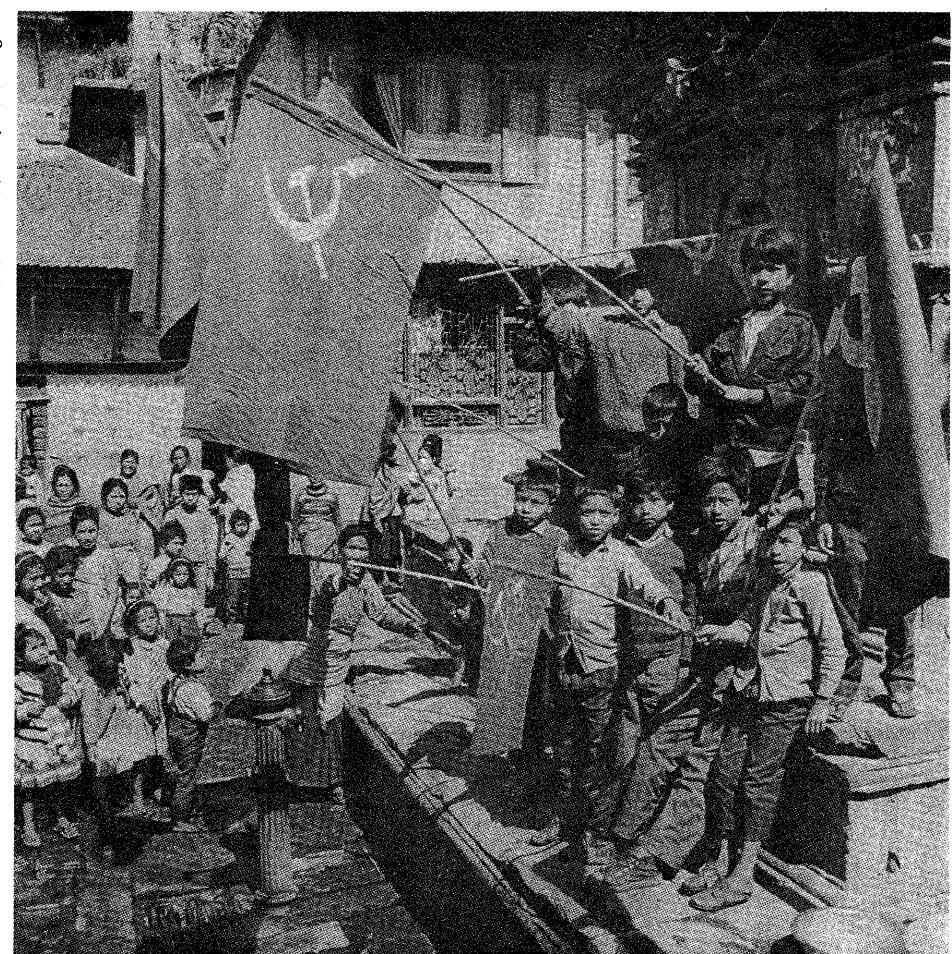
する資本家階級が、生産手段を何一つもたず生存していくためには自分の労働力を資本家に売つて賃金を得るほかはない労働者階級を搾取している。資本家は労働者の労働力を買入れ、賃金に相当する必要労働部分をこえて労働者を働かせることによって剩余労働（剩余価値）を搾取する。個々の資本家と労働者の関係は、労働力という商品をたがいに自由に売り買ひする対等な関係であるかのように外見上は見えるが、階級としての労働者階級は生産手段を所有する階級としての資本家階級に隸属する存在でしかない。資本・労働関係は一つの奴隸制度、すなわち賃金奴隸制度である。

資本主義的生産様式のもとでの生産の「直接的目的・規定的動機」は、資本家による剩余価値の獲得にある。つまり生産は、資本家階級による私的な利潤追求、そのための商品生産の拡

大・資本蓄積を目的として行われるのであって、決して大衆の生活の向上や社会の進歩・発展のために行われるのではない。資本家たちはより大きな利潤を求めて、資本家どうしで激しく競争する。この「社会的生産と資本力は飛躍的に発展し、生産は社会的な性格を強めるが、生産のあらゆる成果は相変わらず資本家によって取得される。この「社会的生産と資本主義的取得の矛盾」と呼ばれる「資本主義的基本矛盾」は、資本主義的生産の発展とともに拡大する。それはブルジョアジーとプロレタリアートとの間の階級対立の増大となつてあらわれ、また全社会的規模での生産の無政府性をいつそう強める。資本主義的生産様式に内在するこのような根本的矛盾は、資本主義が独占の段階にまで到達し世界的に成長し続けている今日、一国のみならず一国の枠をこえて世界的に、さまざまな破壊的形態をとり、ますます巨大な規模で発現している。

資本主義は強靭な生命力と自己変革能力をもつており、「資本主義の基本矛盾」などという観点は今日においては通用しなくなつていると人々がいる。彼らの多くは一国的視野から、しかも帝国主義本国主義的視点に立つて問題をとらえることによって、大きな落とし穴に落ち込んでいるのである。独占の段階にまで発展した資本主義、すなわち帝国主義がみずからの大矛盾を対外転嫁することによってこれを緩和し続けているという現実をみようしなければ、あるいは資本主義が生み出す矛盾は縮小し解消に向かうではなく世界的視野からみればそれは逆に拡大し続けているという事実をとらえようとなれば、先進資本主義国においては、仮に深刻な問題が発生しているにしてもそれは資本主義自身に内在する力によっていずれは克服されるに違いないという錯覚に陥るのである。

資本主義的生産様式の行きつまりは、ブルジョア経済学者たちによってすでに克服され過去のものとなつたとされてきた世界恐慌の相次ぐ発生として現代世界において顕在化している。一九七〇年代初頭以降、資本主義的生産一過剰生産にもとづく恐慌は、米・日・西欧の先進資本主義諸国を襲き、第三世界諸国をもおおいにくす「世界同時不況」として現出するようになつた。商品の輸出入・世界貿易の引き続き拡大に加え、国際的独占体としての多国籍企業による資本輸出・資本投下の急速な伸長、あるいは多国籍銀行等による金融資本の大規模な国際的展開などによって、世界経済はこれまでのどの時代よりもはるかに大規模化し一体化した。この基盤のうえで、資本主義の基本矛盾の爆発としての恐慌は、世界的恐慌=世界同時不況として現出するようになつてゐるのである。もちろん、恐慌がその国の特殊な経済的諸条件に規定されて一国規模で発生することは今後もありう



持続する第三世界の革命運動

(写真は共産党の旗を振るネパールの子どもたち・90年4月)

るだけなく、より以上に第三世界の貧困をいつそう深刻なものにする。商品輸出・資本輸出や金融的手段による搾取・収奪によって第三世界の経済状況は年々悪化しているが、世界恐慌はこれに追い打ちをかける。そしてそのことによって地球的規模での貧富の二極分解構造はより巨大化していく。世界銀行の九〇年の推計によれば、発展途上国では一人当たり所得三七〇ドル未満の貧困者は一一億一六〇〇万人にのぼり、それは総人口の三三%を占め、またFAOの八〇年代半ばの統計では「深刻な栄養不足」に陥っている人口は五億三二〇〇万人にのぼり、それは途上国総人口の一六%を占める。

人類存亡の危機としてとりあげられている国際的な環境破壊問題、あるいは近年クローズアップされている国際的な食糧・人口・都市問題等もまた、資本主義の浪費的で無政府的な生産活動、そして帝国主義による第三世界に対する収奪と支配と結びついて生み出された「危機」

である。

何億、何十億という人々が、この現代世界の矛盾にさいなまれ、生活と生命を脅かされ続けている。まさにこの二〇世紀末の世界において、資本主義的生産様式は地球上の圧倒的多数の人間の生存と相いれなくなっているのである。資本主義的生産様式のもとでつくりだされた巨大な生産力は、現在の生産関係のもとでは歴史の発展と進歩の推進力ではなくその阻害物に転化する。資本主義が生み出した巨大生産力をそのまま無政府的運動のうちにまかせるのではなく、計画的な共同管理下におくことを世界は要求し続けている。そして他方では、資本主義自身が計画的で社会の要求に合致した生産を世界的規模で組織化する条件をつくりだしている。

現代世界において、生産はますます多くの労働者の結合労働によって行われるようになり、一つの工場あるいは同一資本下の工場群のなかでは、最新の情報技術を駆使しながら生産はますます計画的に行われるようになっている。世界経済の資本主義的発展のなかで、生産は社会的な性格を強め続けている。問題のは生産の指揮権・決定権が生産手段を所有する資本家の手に私的に握られていること、それゆえ生産が社会の利益のためにではなく私的な利潤追求のために行われ、社会全体としては、あるいは世界全体としては非計画的・無政府的なものになつてゐているということである。世界的規模で社会化した生産を世界単一の共同管理下におき、計画的生産を組織し、また資本主義的生産様式のもとで押さえつけられる生産力のいつそうの発展を実現するために、生産手段を資本家の私的所有のもとから、真に社会的・世界的な

共同所有のもとにおくことが必要となつてゐる。今日の世界は、ブルジョアジーの国家権力を打倒し、彼らの手から奪い返した生産手段の社会化を世界的規模において実現するプロレタリア世界革命を要求している。世界革命や社会主義・共産主義は、破産した過去の夢物語では決してなく、今日の世界においてもいまだ潜在的ではあるが現実の問題である。

資本主義はまた、ブルジョアジーとプロレタリアーの二大階級をそれぞれ世界的に結合させつつ、一大階級間の階級闘争が一国の枠を超えて、世界的な規模でたたかわれるようになる物理的条件を拡大させている。

ブルジョアジーの側の世界的結合が急速に進んでいる。資本の国際的運動が拡大するなかで、各国のブルジョアジーはますます大きな共通利害を共有するようになっている。巨大化した各國独占資本は、より大きな利潤を獲得するためには、資本の自由な運動にとって障壁となる経済的政治的諸制度の撤廃を要求する。彼らは貿易・投資の自由を要求し、彼らの経済活動に対するあらゆる不安定要素や脅威を取り除くことを要求する。今日、国連がブルジョアジーの国際的な共同意思の決定機関として頻繁に利用されるようになっていて、背景にはこのような経済的現実が存在している。そして、国連があたかも諸国国際協調機関となつていて、そのような現象に幻惑されて、各国ブルジョア政府の協調によって、ゆくゆくは世界国家や世界政府ができるがっていくのではないか、国連はその萌芽になつていくのではないかとの期待や主張も生まれ

ている。

各国ブルジョアジーは世界で生起する事態に共同で対処していくことをますます頻繁に要求されるようになっており、また彼らはそのことを強制されてもいる。それはブルジョアジーが彼らの権益を拡大し、これを彼らの共通の敵から防衛するためである。しかし国際資本間の協力関係がたとえどれほど進もうとも、各国のブルジョアジーが民族的対立を止揚して世界的に統合されいくなどということは現実にはありえない。「経済のグローバル化」が進行すればするだけそれに比例して、より大きな利潤の獲得を目的とした巨大資本間の国際的競争もまた激化し、各国ブルジョアジーの利害を代表する帝国主義国家間の弱肉強食的な争いも激化するというが、われわれの前で進行している現実である。

孤立・分散した小民族を統合し、諸民族の世界的な相互依存関係をつくりだし、生産と市場を國際的なものにしたという点でブルジョアジーは歴史的に革命的な役割をたしかに果たした。しかし資本一般の運動が、多国籍企業の経済活動に示されるように「超国籍的」であるのに比して、ブルジョアジーはおのれの狭い民族的な限界を克服することのできない存在である。生産そのものは国境の枠をこえて国際的に拡大していくが、生産の「物的諸条件」である生産手段は各國のブルジョアジーによって私的・個別に所有されている。したがつて各國のブルジョアジーが私的に所有する生産手段を放棄し、真に社会の共同所有と管理下におくことが

## 階級闘争の世界的一体化

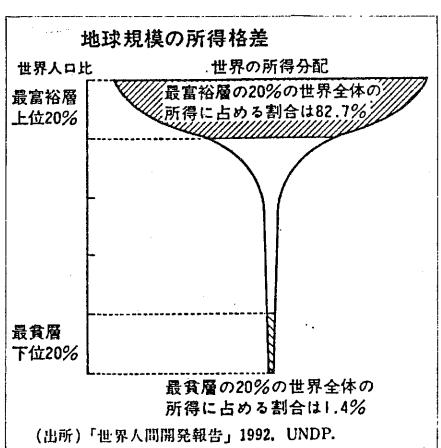
資本主義の世界的発展のなかで、資本・労働関係といふ資本主義的生産関係が拡大し、貧困奴隸階級としてのプロレタリアーが国際的に増大しつつある。古い生産様式は至るところで破壊され、商品生産の拡大とともに新しい生産関係が世界の各地に移植され続けている。資本主義が世界を一体化し、世界を同質化し続けじではないにせよ、資本主義が帝国主義といふ発展段階にある現代世界においても基本的には継続し拡大しているとみるべきである。

現在、世界のなかで群をぬく高度経済成長地帯であり、多国籍企業・資本の大規模な進出がめざましい東・東南アジア地域における現実はその一端を示している。日本による資本輸出の本格的な開始と軌を一にして、この地域の国々の社会は、この一〇〇～二〇〇年間に著しく変化した。資本主義的搾取の拡大、貧困の蓄積とともに、賃金労働者は数的にも増加し、これらの国・

なければ、ブルジョアジーのもとでの世界国家や世界政府などといったものはまったくの空論である。生産手段の私的所有を廃絶し、それを社会的所有に変えるということは強制によって、すなわち国際的なプロレタリアートの国際ブルジョアジーに対する階級闘争の勝利、世界革命の勝利によつてのみ可能となるのである。

資本主義の発展が生み出した地球的な深刻な危機と矛盾は、ブルジョアジーのではなくプロレタリアートの世界政府、すなわち世界プロレタリア独裁のもとでのみ解決されていく展望が切り開かれるであろう。またプロレタリアートの世界政府が成立するための客觀的諸条件は、現実世界のなかに拡大し続けている。もちろんそれは、人間の目的意識的な営為と離れて自動的に実現するというものではない。ただプロレタリアートの嘗々たる革命的実践の蓄積とプロレタリアートの主体的力量の発展を通じてのみ、その可能性はじめて現実的なものとなるのである。

資本主義の発展が生み出した地球的な深刻な危機と矛盾は、ブルジョアジーのではなくプロレタリアートの世界政府、すなわち世界プロレタリア独裁のもとでのみ解決されていく展望が切り開かれるであろう。またプロレタリアートの世界政府が成立するための客觀的諸条件は、現実世界のなかに拡大し続けている。もちろんそれは、人間の目的意識的な営為と離れて自動的に実現するというものではない。ただプロレタリアートの嘗々たる革命的実践の蓄積とプロレタリアートの主体的力量の発展を通じてのみ、その可能性はじめて現実的なものとなるのである。



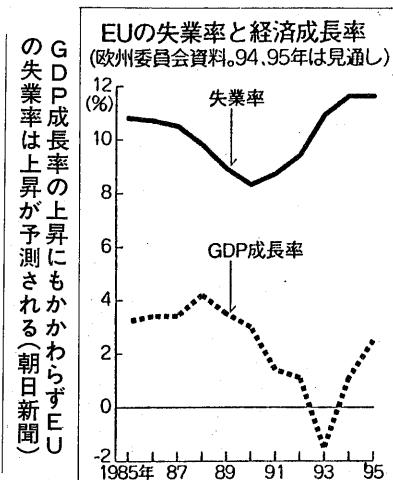
エコノミスト臨時増刊(94.2.7)より

地域の階級構成と階級関係は大きく変化した。そして、韓国、台湾、フィリピン、タイ、インドネシアなどでは労働者階級を主体とした社会運動が成長し、ブルジョアジーに対する闘争が発展しつつある。帝国主義時代が幕を開けした今世紀初頭の「アジアのめざめ」にも匹敵するような事態が、いま始まろうとしているのである。

一九一九年、朝鮮の三・一独立蜂起（一九一九年）、中国の五・四運動（同年）など、アジア諸国の若きプロレタリアートは、いまだ革命的な性格を失っていないかった各国の民族ブルジョアジーとともに帝国主義列強の植民地主義支配と自国の封建的支配階級に反対して民主主義闘争を高揚させ、世界的にも大きな注目を集めた。レーニンはこれを「アジアのめざめ」と呼んだ。そしてこれらはやがて共産党の指導下で大きく発展していった。戦後、一九四九年の中国革命の勝利を端緒にし、アジアのプロレタリアートは朝鮮、ベトナム等において、帝国主義の支配に抗して反帝民族解放・社会主義のたたかいに決起し、世界史を画す偉大な勝利をおさめた。そして現在、共産主義運動の後退期という情勢のなかで、アジア諸国のプロレタリアートは、ふたたび新たな闘争を開始し始めた。

帝国主義とアジア諸国（ブルジョアジー）は、こうして開始されたアジア・プロレタリアートの闘争に対する弾圧を強めるとともに、他方では経済主義のわなをもつて彼らの闘争の階級的発展をおしとどめようとしている。

アジアとは異なるが、第三世界の状況として同じく注目しておくなべきは、ラテン・アメリカ、アフリカ諸国において、帝国主義の搾取と支配がつくりだした絶対的貧困のもとで、帝国主義に対する闘争が継続し、拡大する兆しがみられるということである。九四年一月、反米帝・反NAFTA・独裁政権打倒を掲げたメキシコにおけるサティア民族解放軍の武装決起は



GDP成長率の上昇にもかかわらずEUの失業率は上昇が予測される(朝日新聞)

その典型であった。サパティスト民族解放軍は鮮明に、帝国主義支配の打倒なくして抑圧された人民の解放はありえないことを示した。

これはもはや役に立たない古いテーマであろう。いやそうではない。それは現代世界においてこそ普遍性をもつてゐる。今日の国際的独占

の運動と帝国主義の世界支配が、世界を一つの巨大市場と化しつつ、一方の極に富と飽食、他方の極に貧困、飢餓、環境破壊、人口爆発等を生み出し、両者のあいだの経済的な格差を年々拡大し続いているとき、帝国主義とそれに從

属する各国反動政権に対する反乱が種々の形態をもって噴出し続けるのはきわめて当然のことである。そして自国の絶望的な状況の打開を求めるならば、帝国主義に屈従するのか帝国主義と非和解にたたかいぬくのかという問題に第三

世界の人民は必ず直面するのである。たとえばソマリアでは、国連を利用して軍事介入した米帝をはじめとした国際帝国主義に対し、人々は

当初、一定の期待をもつてこれを迎えたが、時間がたち帝国主義の本性がはつきりするにつれて國連は人民から憎悪される対象となつた。ソマリアの人民は反抗と反乱を開始し始め、これによつて帝国主義は手ひどい失敗をこうむつた。

部族間対立の悲劇として報道されているルワンダの現在の事態も、帝国主義の一〇〇年あまりにわたる支配・介入の歴史と現実を見なければ、その本質を決してとらえることはできない。ルワンダの部族間対立の解決も、部族間融和にもとづく眞の独立も、帝国主義の支配・介入策動の粉砕を通してのみはじめて可能である。ルワンダの人民はみずから闘争をもつてやがてこのことをはつきりさせていくだろう。

さらに帝国主義諸国、そして資本主義化の波に洗われる旧ソ連・東欧諸国においても、資本主義の歴史的行きづまり状況を反映して階級矛盾が激成され、新たな貧困層が形成され、さまざまな社会運動を含みながら階級闘争が新しい様相をもつて拡大していく兆しが見られる。帝國主義諸国内の階級矛盾を典型的に示すものが失業者の増加である。これはとくにEUにおいて顕著であり、昨年三月の時点でEU全体の失業者数は二〇〇〇万人に迫りつつあり、失業率は過去最高の一・一%を記録した。二五歳未満の失業率は二〇%以上に達している。帝国主義諸国においてもブルジョア階級支配の基盤は決

して安定してはいないのである。

市場原理にもとづく経済と社会、すなわち資本主義だけが人類に残されたただ一つの体制だ

という主張が幅をきかせているソ連崩壊後の今日の時代にあってもなお、全世界で資本主義・

帝国主義のつくりだす矛盾に対して、支配され抑圧を受ける人民は不可避にたたかいで立ち上がる。問題なのは、人民の苦悩と解放の希求がない。問題なのは、人民のたたかいは絶えてはない。問題なのは、人民のたたかいは絶えてはない。

エネルギーが、共産主義運動の後退のなかで、おうおうにして民族幻想や宗教原理のもとに統合されていっていることにある。ソ連崩壊後の世界において、実際に多くの人民対人民の戦争がばつ発し、実際に多くの無益な血が流れ続けている。ボスニアでの事態はその象徴である。ともに手をたずさえて帝国主義の介入とたたかうべき人民が、世界のあちこちでたがいに憎しみあい殺しあっている。プロレタリアートこそがこのような状況に終止符を打たねばならない。

プロレタリアートはその本性からして世界的な階級である。彼らは本質上、国際主義者である。

彼らには国境もなく祖国もない。彼らが必要としているものは賃金奴隸制度の廃絶であり、これを通じた階級の廃絶と諸民族の眞の融合である。それは抽象的・一般的な理念としてではなく、今日、世界のプロレタリアートが現実にめざすべき課題となっている。プロレタリアートを国際的に緊密に結合させ、プロレタリアートの階級闘争を世界的に一体化させていくための意識的なたたかいが必要となっている。

新しい世界の現実に立脚した共産主義運動の復興の時代が始まりつつある。この地球上からあらゆる貧困と抑圧を一掃し、一握りの国の支配級による富と財貨の国際的独占を廢止し、あらゆる国々の労働者人民が飢えて死ぬことがなく、その最低限の生活の必要を満たし、より豊かな生活の展望を共同で切り開いていくことができるようになるために、そして階級も国家も存在しない新しい歴史段階の社会を建設していくために、たとえどれほど多くの敗北や回り道を必要としようとも、共産主義運動は復興されねばならないのである。

# ■第一章

## ■ 面するわれわれの戦略的任務

われわれが際会している一時代は、国際共産主義運動の大後退期であり、にもかかわらず資本主義世界がその根本的行きづまりを露呈し、他方では階級闘争が世界的に一体化する物質的条件をますます急速に煮つめあげていくという時代である。それは共産主義運動と階級闘争を次の攻勢期の到来に向けて再建するための一時代である。それは革命的構造と対峙しつつ、この一時代を革命の持久戦の時代としてたたかいたいぬかねばならない。持久戦―それは次の攻勢に向けた準備戦である。

この持久戦の時代における革命的プロレタリアートのもっとも重要な任務は、党建設にある。われわれは性格の異なる次の二つの党的建設を同時に並行して追求しなければならない。その一つは国際プロレタリアートの单一の最高の団結組織であり、世界革命の司令部としての世界党である。他の一つは日本において武装蜂起の勝利とプロレタリア独裁の樹立を準備する中央集権非合法党としてのわが国の前衛党である。日本の党をつくつてから世界党をめざすという段階論的ではなく、この二つの異なる党的建設を同時一体的なものとして推進すること、ここに現代世界の革命的プロレタリアートの第一級の任務がある。そして、この世界党とわが国の前衛党の建設の事業を結合して前進させていくために、われわれは次の三点を革命的プロレ

タリアートが今日にならべべき戦略的任務として掲げる。

第一に、世界の新しい現実に立脚した共産主義運動の経路線・革命的綱領を獲得していくことである。

国際的にも国内的にも、時代の大きな変化に對応して、多くの政党・党派が路線・綱領の見直しを始め、その改定に向かっている。先進国民党は今日のイギリス労働党、日本社会党などに代表されるように、冷戦の時代の終わりとともにイデオロギー対立や「保守対立」の時代も終わつたというペテン的な主張をもとに、新しいブルジョア政党への転身をはかっている。彼らは社会民主主義的に歪曲されたものではあつたとはいえ、社会主義や国有化政策などを盛り込んだこれまでの綱領・路線の放棄を始めている。同様のことは、先進国スターリン主義諸党においても発生している。ソ連の崩壊に先立つて左翼民主党と名称変更した旧イタリア共産党多數派、あるいは昨年の党大会で綱領を全面改定し社会主義の旗を降ろした日本共産党…。彼らは帝國主義の超過利潤に経済的基礎をおく社

会民主主義の一潮流に転化した。またわが国においても種々の傾向をはらみながら台頭する清算主義の諸潮流は「レーニン主義はもう古い」を合言葉にしながら、ある者は構造改革派に先祖帰りし、ある者は市民主義運動内左派の位置を占めることに次の展望を見いだそうしている。われわれの党の日々の全活動を規定するものは党の総路線である。そして総路線は党の綱領として表現される。党の総路線＝綱領は、新しい時代の到来にふさわしいものに改定され強化されねばならない。われわれは誰よりもこのことにに関して意識的でなければならない。先にあげた諸政党・党派の綱領・路線の右翼的改定は、革命的プロレタリアートが決して迷い込んではならない敗北の道である。われわれは彼らの誤りとは鮮明な分歧を引く必要がある。

われわれの綱領はまず、世界革命の実現を当面の目的の第一に掲げる綱領でなければならぬ。われわれの党綱領は当面、われわれの現実的な存在に規定されて、日本の党の綱領という意味での一国綱領という形式から自由にはなりえない。しかしその形式ではなくその内容においてはわれわれの党綱領は、マルクスによる第一インター・ナショナル以来の国際共産主義運動の全成果の正当な継承をめざし、国際プロレタリアートの共通する歴史観と世界観、資本主義・帝国主義に対する原則的批判、あるいは国際プロレタリアートの共同の行動によってのみなしあげられる世界革命という世界のプロレタリアートに共通する「原則部分」を含むものでなければならない。

この点で留意しておかねばならないのは、スター・リーン主義支配下の国際共産主義運動においては、各国党はこの原則部分を欠落させた行動

綱領をもつことしか許容されず、スター・リーン主義支配のゆみが始まつた戦後においても、綱領の原則部分の欠落という状態は継続してきたといふ歴史的な事実である。プロレタリア世界革命をめざす世界党が单一司令部として存在し、各国民党が世界党の一部を構成するのであれば、世界党綱領の不可欠の一部分として各國革命の特別な任務が各行動綱領において規定されるということは何ら問題ではない。むしろそのような綱領の形式は、世界革命の勝利にとってもとも望ましいものであるとさえいえる。しかし世界党が機能停止に陥り、あるいは消滅し、世界党綱領と切り離されて各國行動綱領が独立化していくば、それは必ず一国主義の綱領となり、世界革命も、そして世界革命を通じてはじめて現実的な問題となる共産主義の実現もお題目化していく。

共産主義運動とは本来、国際的な運動であり、プロレタリアートの国際的共同行動による世界革命を不可避に要求するような運動である。一八六八年に創設された第一インター・ナショナルはその規約において次のようにいふ。「労働の解

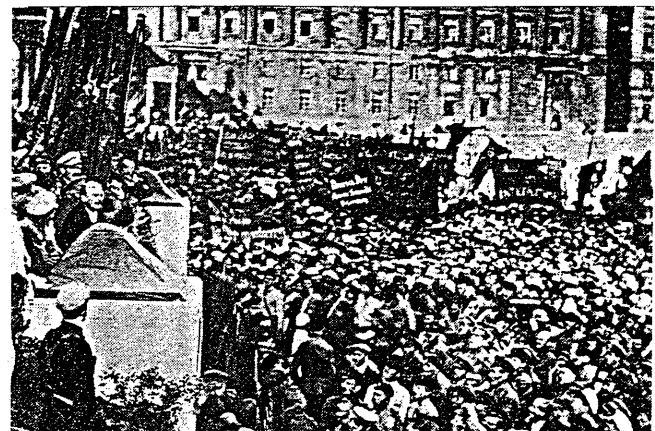
放は、地方的な問題でも一国的な問題でもなく、近代社会が存在しているすべての国々を包括する社会問題であり、その解決は、もつとも先進的な国々の実践的および理論的な協力にかかっている」。このような原則的立場が復権・継承を占めることに次の展望を見いだそうしている。われわれの党の日々の全活動を規定するものは党の総路線である。そして総路線は党の綱領として表現される。党の総路線＝綱領は、新しい時代の到来にふさわしいものに改定され強化されねばならない。われわれは誰よりもこのことにに関して意識的でなければならない。先にあげた諸政党・党派の綱領・路線の右翼的改定は、革命的プロレタリアートが決して迷い込んではならない敗北の道である。われわれは彼らの誤りとは鮮明な分歧を引く必要がある。

われわれの綱領はまず、世界革命の実現を当面の目的の第一に掲げる綱領でなければならぬ。われわれの党綱領は当面、われわれの現実的な存在に規定されて、日本の党の綱領という意味での一国綱領という形式から自由にはなりえない。しかしその形式ではなくその内容においてはわれわれの党綱領は、マルクスによる第一インナー・ナショナル以来の国際共産主義運動の全成果の正当な継承をめざし、国際プロレタリアートの共通する歴史観と世界観、資本主義・帝国主義に対する原則的批判、あるいは国際プロレタリアートの共同の行動によってのみなしあげられる世界革命という世界のプロレタリアートに共通する「原則部分」を含むものでなければならない。

この点で留意しておかねばならないのは、スター・リーン主義支配下の国際共産主義運動においては、各国党はこの原則部分を欠落させた行動

綱領をもつことしか許容されず、スター・リーン主義支配のゆみが始まつた戦後においても、綱領の原則部分の欠落という状態は継続してきたといふ歴史的な事実である。プロレタリア世界革命をめざす世界党が单一司令部として存在し、各国民党が世界党の一部を構成するのであれば、世界党綱領の不可欠の一部分として各國革命の特別な任務が各行動綱領において規定されるということは何ら問題ではない。むしろそのような綱領の形式は、世界革命の勝利にとってもとも望ましいものであるとさえいえる。しかし世界党が機能停止に陥り、あるいは消滅し、世界党綱領と切り離されて各國行動綱領が独立化していくば、それは必ず一国主義の綱領となり、世界革命も、そして世界革命を通じてはじめて現実的な問題となる共産主義の実現もお題目化していく。

共産主義運動とは本来、国際的な運動であり、プロレタリアートの国際的共同行動による世界革命を不可避に要求するような運動である。一八六八年に創設された第一インター・ナショナルはその規約において次のようにいふ。「労働の解



コミニテルン2回大会開催のための集会で演説するレーニン

うとしたのである。同時にネップの諸政策は社会主義権力が統制する「国家資本主義」（この用語は「無政府的資本主義」に対する反対概念として使われている）の育成と結びつけられていたが、それはまた資本主義への一時的な妥協であり一步後退と位置づけられていた。強力なプロ独権力とソビエトが存在するならば、資本主義への戦術的妥協は世界革命に至るまでの息つきとなるばかりでなく、孤立した一国での社会主義経済の物質的な基礎をつくることにもなるとされたのである。この戦略は成功をおさめロシア革命は防衛された。ネップの経験を一面的に普遍化し、ネップこそ社会主義経済の理想的なモデルであり、社会主義経済は市場経済プラス計画経済などとすることは、ネップの歴史的意義の否定であるばかりでなく、社会主義経済に対する原則的な点での歪曲である。

ソビエト権力が広範な大衆の共感と参加によって支えられ、プロレタリア独裁が強化され続けたことによって、はじめてロシアのネップはロシア革命の持久戦略であることができた。またこれを可能にしたのはロシアの党指導の基本的正しさであり、党の不断なる強化であった。このような条件を欠くならば、それがいかにネップと形態上似ていようとも、それらはすべて、資本主義への意識された後退ではなく、資本主義への公然たる屈伏となっていくのである。「社会主義市場経済論」で粉飾された現中国の改革・開放路線が、実際には外国資本の導入をこととした商品生産の拡大、商品・貨幣関係の拡大による資本主義化路線にすぎないものであることはその典型といえる。中国共产党は、社会主義の旗を党・官僚特權階層の利益を防衛するためのカムフラージュとして利用しているだけなのである。

スターリンは一九二〇年代後半にネップを中止し、強制的農業集団化、強行的工業化の路線を出した。スターリンが真に批判されねばならない点は、ゆるやかな経済建設路線を強権的なものに代えたということにあるのではなく、彼

が世界革命に至る持久戦略としてのネップの意義を否定し、一国生産力の増大によって一国でも社会主義は完全な勝利をおさめることができるという誤った路線にボルシェビキ党的路線を転換したことにある。スターリンの一国社会主義路線のもとで、ロシア一国革命の世界革命への波及と転化の道は封じ込められ、革命の持久戦略はソ連国家防衛戦略にすりかえられた。

ロシア革命が逢着した問題に実践的に答えようとしたものが中国革命であり、毛沢東指导下の文化大革命—プロ独下での継続革命であった。

毛沢東はスターリン主義の一国社会主義路線に対する根本的批判を欠いたため、社会主義勝利の前提を世界革命におくという点で不徹底であり一国主義的であったが、一国で権力奪取に勝利した革命がプロ独下で継続され発展させられないかぎり、やがては革命権力も腐敗し、資本主義の復活や発展を許すことを、フルシチヨフ以降のソ連社会に対する批判をもって提起し、

社会主義が資本主義かの二つの道をめぐる闘争がプロ独下で組織され続けられねばならないことを提起した。社会主義勝利の原動力を生産力にではなく階級闘争に求め、プロ独下でも階級闘争は引き続き必要であるとした点においては毛沢東・継続革命論は正当に評価されるべきであるし、それはソ連等の一国プロ独の変質に対する相対的に正しい批判であった。ロシア革命以降の社会主義建設の経験をみてみれば、生産力主義にもとづく連型社会主義建設路線はすべて破壊しているのであり、毛沢東が提起した問題は普遍的な意義をもっている。

#### 『協同組合について』）。

「プロレタリアートの独裁は階級闘争の終了ではなく新しい形でのその継続である」とレーニンは主張したが、文化革命もまたプロ独下階級闘争の重要な一部分であった。内戦期を乗り切ったロシアにおいて、先進的労働者・農民を国家と経済を運営する直接の主体として教育し形成していくための文化革命の前進なくして、社会の経済的・政治的基礎的根本的改造（社会革命）に踏み出していくことはできず、社会主義建設において文化革命は決定的に重要な位置を占めるものであるとレーニンは確信していた。

毛沢東の継続革命—文化大革命は、レーニンの「階級闘争継続」の主張をきわめて一面的に継承するものでしかなかった。毛沢東は継続革命の内容措定において失敗した。そしてその敗北のなかから、階級闘争の停止と生産力の発展の主張をもって、混乱し疲弊した中国社会において登場した鄧小平経済主義の台頭を許すことになったのである。鄧路線の台頭は現実的な根拠をもつものであった。それは毛沢東路線の大きな欠落部分につけいって伸張したのであった。

一国プロ独としての中国の革命権力に要求されていたのは、遅れた資本主義国としてのロシアがいかにして社会主義への展望をつかむのかという課題とまさに同質のものであった。むしろ状況は農業国といえる中国ではよりシビアであった。問題の中心の一つは、圧倒的多数を占

める中国の貧農、そして都市の労働者大衆に対する文化的・政治的教育であり、同時にまさにレーニンが構想したように革命発展の、社会主義建設の物質的条件を獲得するための国家資本主義の育成であった。中国のような発展段階の社会主義国において必要とされた階級闘争は、国内ブルジョアジーを観念的に設定してこれと闘争する（結局それは「走資派」との闘争といふ）ことではなく、晩年のレーニンが構想した、ソビエト権力によって統制された国家資本主義の育成と結びついた「文化革命」であった。一九二三年の口述筆記の論文においてレーニンはつぎのように述べた。「われわれは社会主義にたいするわれわれの見地全体が根本的に変化したことを見、みとめないわけにはいかない。この根本的变化は、以前はわれわれが重心を政治闘争、革命、権力の獲得などにおいていたし、おかしいわけにはいかなかったが、いまではこの重心が社会主義が資本主義かの二つの道をめぐる闘争がプロ独下で組織され続けられねばならないことを提起した。社会主義勝利の原動力を生産力にではなく階級闘争に求め、プロ独下でも階級闘争は引き続き必要であるとした点においては毛沢東・継続革命論は正当に評価されるべきであるし、それはソ連等の一国プロ独の変質に対する相対的に正しい批判であった。ロシア革命以降の社会主義建設の経験をみてみれば、生産力主義にもとづく連型社会主義建設路線はすべて破壊しているのであり、毛沢東が提起した問題は普遍的な意義をもっている。

#### 『協同組合について』）。

「プロレタリアートの独裁は階級闘争の終了ではなく新しい形でのその継続である」とレーニンは主張したが、文化革命もまたプロ独下階級闘争の重要な一部分であった。内戦期を乗り切ったロシアにおいて、先進的労働者・農民を国家と経済を運営する直接の主体として教育し形成していくための文化革命の前進なくして、社会の経済的・政治的基礎的根本的改造（社会革命）に踏み出していくことはできず、社会主義建設において文化革命は決定的に重要な位置を占めるものであるとレーニンは確信していた。

毛沢東の継続革命—文化大革命は、レーニンの「階級闘争継続」の主張をきわめて一面的に継承するものでしかなかった。毛沢東は継続革命の内容措定において失敗した。そしてその敗北のなかから、階級闘争の停止と生産力の発展の主張をもって、混乱し疲弊した中国社会において登場した鄧小平経済主義の台頭を許すことになったのである。鄧路線の台頭は現実的な根拠をもつものであった。それは毛沢東路線の大きな欠落部分につけいって伸張したのであった。

一国プロ独としての中国の革命権力に要求さ

れていたのは、遅れた資本主義国としてのロシアがいかにして社会主義への展望をつかむのかという課題とまさに同質のものであった。むしろ状況は農業国といえる中国ではよりシビアであつた。問題の中心の一つは、圧倒的多数を占

一派共産党が特權層の発生を許さず、人民に対する長年の国際主義的教育、プロレタリア民主主義の実践を積み重ね、ソ連型とも中国型とも異なる第三の道を切り開くことにある程度成功していった結果であった。今日、キューバ共産党は、一国革命権力の防衛と発展という点において、いっそうの飛躍を要求している。そしてこの飛躍に彼らが成功すれば、必ずそのなかにはネット以来の国際共産主義運動が直面し続けてきた壁を突破する普遍的な内容が存在するにちがいないのである。

## 民族解放と社会主義の結合

コミニンテルンが直面し続けた問題の他の一端は、植民地・従属国における民族解放闘争の勝利をいかにして社会主義に向けて発展させていくのかという問題であった。

レーニンとコミニンテルンは、世界革命を先進資本主義国における社会主義革命と植民地・従属国における民主主義革命との結合として構想した。それは第一インターのヨーロッパ中心主義の誤りに対する批判であり、またあらゆる民族が抑圧民族と被抑圧民族とに分裂・対立させられている帝国主義段階の世界に立脚した社会主義革命の新しい構想であった。さらに

コミニンテルンの世界革命構想は、ヨーロッパ革命が不発におわり、他方、植民地・従属国ではアジアを中心にして人民の運動の新しい高揚が始まっていたという現実を反映したものであった。コミニンテルンには実態的にもその当初から、ロシア革命の影響を受けて共産主義にめざめていた植民地・従属国の若き共産主義者たちが結集していた。コミニンテルンは植民地・従属国の革命がプロレタリア世界革命の不可欠の一環であることを明らかにしながら、民族解放闘争の勝利を社会主義革命の前進へと導いていくという見地を鮮明にしていった。そして植民地・従属国、反帝闘争、民主主義運動を国際的な共産主義運動に結合させることを条件にして、資本主義の段階をへないで民主主義革命から社会主義へと植民地・従属国、革命を直接に発展させていくという、まったく新しい展望が提示されしていくことになったのである。

しかしその後、スターリン主義によってコミニンテルンが支配されるなかで、民族解放と社会主义との結合、社会主義への直接的発展の展望は放棄され、民族解放革命は社会主義的発展の道を閉ざされた。中国革命に対する態度に典型的に示されたようにスターリンは、民族解放はブルジョア民主主義革命の課題であり、この革命の指導階級はブルジョアジーであるとし、ブルジョアジーへの追随をプロレタリアートと共に主張する者に要求した。「中国のブルジョア民主主義革命は、新しいブルジョア民主主義革命の

範囲に属するものにかわり、革命の陣営のうえでいえば世界プロレタリア社会主義革命の一部となつた」(毛沢東『新民主主義論』一九四〇年)という立場から、当面する中国革命の性格を「新民主主義革命」ととらえていた毛沢東指導下の中国共産党は、国民党への追随を要求するスターリンの指導を受け入れず、民族解放闘争に対する共産党の指導を放棄せず、党中央解放区の独自陣形を堅持した。そして民主主義革命の段階では共産党は権力を握るべきでないとしたスターリンの指導を拒否して、中国革命の勝利を連続する社会主義革命へと発展させていこうとしたのである。中国共産党・毛泽東路線はこの面では、植民地・従属国の民主主義革命を社会主義へと連続的に発展させることを問題にしたコミニンテルンの正当な繼承者であったといえる。しかし中共・毛路線はインテーを不要とする観点に立っており、世界党的存在を前提にして植民地・従属国革命の社会主義への発展を展望したコミニンテルンの戦略を部分的にしか継承できなかった。

民族解放闘争をめぐるこのような問題と課題

## 帝国主義国での革命の敗北

さらに、先進資本主義国革命の敗北という問題についてみておかねばならない。

第二インターの世界革命構想の挫折は、ます何よりもドイツをはじめイギリス、フランスなど西ヨーロッパの資本主義先進地域において社会主義革命が成功せずに敗北したことによつてもたらされた。戦後革命期をへてもつに帝国主義下の革命運動はどの国においても勝利せず、そしてこのような状況は、世界革命運動にますます大きな困難をつけつつ、今日の時代にまで継続している。ソ連・東欧諸国が無惨な崩壊をとげたこと、中国社会主義が変質したこと、そして第三世界の「社会主義国」が相次いで崩壊していく事態の背景には、先進資本主義国における革命の敗北があることをわざわざ忘れてはならない。帝国主義心臓部における革命の敗北こそが、帝国主義による先にあげた国々への包囲・干渉・介入を許し、それらの国々の人民に大きな困難を強いることになつたのである。

先進資本主義国における革命の敗北という事態をとらえて、ブルジョア陣営の側から、マルクスの予言ははずれた、それはマルクス主義そのものが理論的にも破産した証拠だとする主張が貫して宣伝されてきたし、八九年以降は、そのような主張はプロレタリアートにも大きな影響を与えるようになってきている。ブルジョア評論家・学者たちは言う。マルクスは資本主義が高度に発達した国においてまず革命は起

は今日の時代にまで引きつがれている。今日の時代の植民地・従属国としてある第三世界の反帝民族解放・社会主義革命の実践のすべては、社会主義革命への前進と発展をめぐって大きな壁に逢着した。たとえばアフリカでは戦後、「アフリカの年」と呼ばれた一九六〇年を頂点として、植民地支配からの独立が次々とからちとられていった。そしてそのうちの多くの国で、種々の色合いをもつ「社会主義政権」が誕生した。これらの国々は八〇年代後半の東欧・ソ連崩壊と軌を一にして、今度は一転、マルクス・レーニン主義の放棄、複数政党制の導入、市場経済の導入などを合言葉にして社会主義の放棄へと走つていったのである。アフリカ「社会主義」の多くはソ連をモデルにした社会・経済政策を採用しており、長い植民地支配の結果もたらされた経済の荒廃と立ち遅れとも相まって、その破たんはある意味で不可避免であった。

こうして第三世界革命の社会主義革命への飛躍という二〇世紀的な課題は、いくつもの成果を生み出しつつも、いぜん世界革命の逢着問題であり続いているのである。

民地・従属国から得られる超過利潤によって買収し、階級支配の安定をはかるとともに、対外侵出と侵略戦争遂行のためにプロレタリアートを排外主義的に統合していくこと、これは資本主義的帝国主義の本性にもとづくものである。またそのことは一度の帝国主義世界戦争に先立つ過程において、すべての帝国主義交戦国で先鋭な形をとつてあらわれた。独立資本主義としての帝国主義の成長とともに、プロレタリアートの内部に、自国帝国主義の発展のなかに自分たちの生活の向上を求める経済主義が自然発生する。そしてそれは帝国主義の対外膨張と結びついて帝国主義的排外主義へと転化していく。この自然発生性をプロレタリアートの内部において代表しようとするものが社会民主主義者である。社民の本性は経済主義である。彼らはプロレタリアートの経済主義的自然発生性を代弁し、そしてこれを固定化する。そしてプロレタリアートを資本と政府への経済要求の、資

## 共産主義者の国際的団結

今日の時代に必要とされる戦略的任务の第一は、全世界に散在する共産主義諸党との関係の開拓、実践的共闘、そして原則的論争を開始していくことである。

われわれは今日の世界において、国際共産主義運動の再建だけでなく世界党の再建が必要であることを正面から掲げる。世界党の建設などといふことは夢物語だといふ人々がいる。現実にも世界党は不要だとして公式に解散させられた歴史がある。しかし、コミニンテルンの解散から半世紀あまりをへた今日、現実の世界は、世界党という国際プロレタリアートの団結体であり世界革命の单一司令部でもある国際組織をますます強く求めているのではないか。資本の運動の国際化とともに、ブルジョアジーの側が擬制的にせよ一体化を強めているとき、ブルジョアジーの打倒は今日の世界では、これまでのどの時代よりも緊密に結びついたブルジョアジーの側の世界的連合を打破していくことと結びついてしか実現できない。ブルジョアジーに対するあらゆる反乱、その規模が大きければ大きいほど、またそれが革命的な性格をもつものであればあるほど、ブルジョアジーはそれが世界のどのような場所であれ、共同して反革命的介入をもくろむのである。もちろんこのような動きはいまに始まつたことではない。戦後世界において帝国主義は、第三世界を中心とした革命運動、反帝民族解放・社会主義革命運動に対し、米帝のヘゲモニーのもとで共同の反革命介入を一貫して組織し続けてきた。ソ連崩壊と米帝の経済的力量の低下のなかで、そのような策

本主義に対する改良要求運動の枠にしばりつけられる。さらに危機と戦争の時代には、社民は社会愛国主義・社会帝国主義に転化し、プロレタリアート人民を反革命の側へと、帝国主義戦争へと組織する先兵の役割を担うのである。

先進資本主義国における革命運動の敗北は、ブルジョアジーに対する敗北であると同時に、プロレタリアート内部におけるブルジョアジーの代理人であるこれら経済主義・社民に対する敗北でもあつたのである。経済主義との闘争の不徹底性、あるいはその敗北という問題は、現在もなお克服されざるコミニンテルンの「逢着問題」に実践的な回答を与えるものでなければならない。

われわれがたたかいといるべき革命的綱領はまず何よりも、レーニン・コミニンテルンの実践を通じて浮き彫りにされた以上のような国際共産主義運動上の「逢着問題」に実践的な回答を与えるものでなければならない。

動はいつそう露骨になつてきているということである。たとえば今日、帝国主義は北朝鮮やキーバの現政権の崩壊や変質を狙い、国際的に協調して政治的・軍事的・経済的な圧力を強め続けている。帝国主義は必要であればいつでも、これらの国に軍事侵攻を発動できる準備を着々と整えている。あるいはまたもし現在の経済危機にあえぐロシアにおいて、支配層に対する反乱がわき起り、それが支配層の統治能力を越えて新しい革命に向かうような発展を示した時には、資本主義的ロシアが維持されることを利益とする帝国主義国は連合し、共同の反革命的介入を試みるであろうことも予想に難くない。こうしたブルジョアジーの側の政治連合に対して、プロレタリアートの側にこそ団結と闘争の单一の国際組織が必要になっている。

反帝闘争のための、あるいは各國革命運動の相互支援のためのプロレタリアートの国際共同行動を組織し、各国の階級と階級闘争を横つなぎ、国際帝国主義に対する闘争を前進させ、国際ブルジョアジー打倒の世界革命をめざす世界党を準備するために、原則的な共産主義者間の結合が組織されねばならない。

今日の世界において、帝国主義の世界支配の強化をして、スターリニズム、トロツキズムを含むさまざまな政治潮流が国際会議の開催など種々の動きを始めている。われわれは現存する種々の潮流のうち、毛沢東主義の共産党・諸グループに大きな関心をもつ。それは彼らが現在の共産主義運動の後退に歯止めをかける目的をもつて、いくつかの国際会議を継続して開催しているからであり、また第三世界のいくつかの国では彼らは依然として一定の力をもつて革命運動を指導し続けているからである。われわれは毛沢東主義によって、今後の共産主義運動の展望が切り開かれるとは考えてはいな



ドイツで開かれた毛沢東派の国際セミナー（93年11月）

い。毛主義が国際的になお一定の位置を保持しているのは、その行きづまりが明確な形をとることなく、「無傷」のまま八九一九年を迎えたからにすぎない。しかし当面、毛派系の国際的集まりに世界的な反攻勢に抗する原則性をもつ部分が結集してくる可能性は大きいのであり、ここから世界党再建をともに担おうとする部分が生まれてくる可能性もある。

現在はまだ世界党の再建が、共産主義者のあいだの現実の課題として論じられる段階にはない。いま必要なのは、ソ連・東欧の崩壊に至る国际共産主義運動のいったんの敗北の歴史に対する共通の総括を獲得していくための論争を開始していくことであり、そして何よりも、今日の国際帝国主義の世界支配に対する一致した見解をもって、国際階級闘争の前進を共同の努力をもってかちとつていくことである。

またわれわれはアジア人民共同の反帝闘争の組織化を推進し続けながら、他方でアジアにおける共産主義者の団結の再建と強化をめざす。アジア諸国の経済的・政治的状況は多様であり、諸国のが共産主義者が直面する課題も多様である。それゆえアジア規模での各国共産主義者間の結合は、決して自然発生的に要求されるものでも、ましてや実現されるものでもない。それは非常に困難な事業である。にもかかわらず、アジアの共産主義者の団結を再建し強めていくことは、今日の状況下では緊要の課題である。アジアは共産主義運動の種々の遺産が継承され続けていた地域の一つであり、ソ連崩壊後ここにおいて、各国の共産主義運動に対する解体の攻撃が強まっている。これに抗するアジア共産主義者の共同の闘争と陣形が必要とされている。われわれはアジア共産主義者の団結の再建を展望し、アジア諸国・地域の共産主義者協議会の建設を追求する。

いまだ小さな試みにすぎないが、このような国際的活動を通じて、はじめてわれわれは世界党建設を単なる理念から現実的な課題に転化する一步を踏み出すことができる。ある。

## 日本における前衛党建設

われわれの第三の戦略的任務は、わが国において日本帝国主義打倒を実現する階級闘争を、そしてその前衛党を基礎から組織していくことである。わが国の階級闘争は、戦後半世紀をして復活し強化した日帝がアジアへの全面的支配に乗り出そうとするまさにその時に、大きな後退を強いられている。それは再建されねばならない状況にある。われわれは全力をあげて、日本階級闘争の再建の任務をなうにたる前衛党へとみずからを飛躍させていかねばならない。

日本共産党が社会民主主義に転落し、新左翼運動内部においてもこれに追随する動きが拡大しているなかで、自國帝国主義打倒を綱領・総路線の柱として掲げ、それを現実の実践を通じて準備し実現しようとする強大な前衛党を建設していくことは、帝国主義足下のわが共産主義者の最大の責務である。またそれは、わが共産主義者同盟の四〇年にもおよぼうとする党建設の、そして一九七五年の共産主義者同盟(全国委員会)党内・分派闘争以来ちょうど二〇年間におよぶ党建設の歴史をかけた根本的な事業である。

共産主義者同盟は一九五八年、民族主義、平

## 九五年をいかにたたかうべきか

### 第二章

一九九五年こそ、われわれの党建設を飛躍させると好機である。われわれは国内外の活動において、この一年を通じて九五年以降の展望を切り開く成果をつかみとらねばならない。

国際的には九五年はどのような年となるのか。九五年は第二次帝国主義戦争の終結から五〇周年にあたり、そして戦後世界支配をもくろんだ米帝を中心にして創設された国連の発足から五〇周年にあたる。国連五〇周年を機にした国連改革の一環として、国連憲章からの敵国条項の削除、日・独の安保理常任理事国入りが画策されている。国連は、ソ連の消滅、中国の変質、そして日・独の安保理常任理事国入りのなかで、文字通り国際帝国主義の支配の道具へと再編されようとしている。これによって、国連PKO、多国籍軍、国連軍などを使った帝国主義による共同の反革命介入がいつそう強化されていくようになる。

また世界資本主義の国際経済機構の面では、

和革命、議会主義に屈伏した当時の日本共産党から分裂し、世界革命、暴力革命、プロレタリア独裁とレーニン主義の復権を掲げ、日本における眞の共産主義前衛党建設の一歩を踏み出した。そして折からの六〇年安保闘争の全人民的高揚を、みずからその最先頭に立ちきることによって、歴史に残る大闘争を組織することに成功した。しかし第一次ブンドはその階級的基本盤の小ブル性、そしてその路線的・思想的基礎における雑炊性によって、安保闘争の終えんと同時に空中分解した。第一次ブンドの限界を克服しうまく結成された第二次ブンドもまた、ベトナム反戦闘争をはじめとした六〇年代後半の全人民的政治闘争をその最左派の位置で担いながらも、第一次ブンド同様の敗北の道をたどった。一九七五年のわが共産同(全国委)の党内・分派闘争は、プロレタリアートと階級闘争に対する指導内容を、結局のところ綱領・総路線ではなく戦術における左派的突出に求めざるをえなかつた第一次・第一次ブンドの急進民主主義的限界を、原則的資本主義批判とレーニン主義党建設を路線の基礎におきながら突破しようとした試みであった。また他方でそれは、急進民主主義批判や「綱領の党の建設」の名に隠れて党を破壊しようとした解党主義者との激しい路線闘争としてあった。そしてわれわれは解党主義者とたたかい、党建設の道を守り抜き堅持してきたのである。

総じてこれらは、社共に代わる前衛党の建設をめざし、その政治的・組織的基礎を獲得していくためのたたかいとしてあつた。われわれにとってそれは大きな成果をおさめた。しかし、われわれが迎えようとする新しい時代は、こうした成果を保守し着実に積み上げていけば次の展望が切り開かれていくというような生やさしい時代ではない。党建設の基本的骨格を堅持しながら、再び数段の飛躍が要求されるという段階にわれわれは際会しているのである。

搾取・収奪がいつそう強まり、帝国主義と第三世界のあいだの矛盾が深まり、第三世界の貧困に拍車がかかっていくことは必至である。国連改革とWTO発足は九五年に世界で進行する帝國主義の攻撃と支配を象徴するものである。このもとでNATOに代表され新しくはCSCC(全欧安保協力会議)やARF(アセアン地域フォーラム)等を含む地域的安全保障体制の構築が準備され、EU、NAFTA、AP、EC、EAECなど米・日・EUの三極を軸にした地域的経済圏の形成が進められる。要するに国際ブルジョアジーが世界をいくつかの地域に分割・統合しつつ、全世界を経済的・政治的に軍事的に支配し、利益を食らい合う体制がますます強化されようとしているのである。これがブルジョアジーが主張してきた「国際協調」や「新世界秩序」なるものの実像である。こうしたブルジョアジーの側の共同行動の発展は、最大限の利潤追求をその運動の動機と目的とする資本の本性を廃止するものではなく、各國ブルジョアジー・帝國主義のあいだの、市場や資源を独占しようとする競争と対立と抗争はますます激化せざるをえない。

では国内的には九五年はどのような年になるのか。

九五年は日帝の敗戦五〇周年であり、日帝は国際帝国主義としての飛躍をかけ、「戦後五〇

周年」を最大限活用して戦後政治の総決算、国際帝国主義としての成長を阻むあらゆる戦後の制約の打破を狙っている。そして対外侵出の拡大を可能にし軍国日本の復活を支える国内の政体体制を、保守一大政党として構築しようとしている。國連安保理常任理事国入り、改憲、有事立法制定、海外派兵の拡大、戦後補償問題の欺まん的決着、増税…。これらは相互にからみ合いながら、全体として日帝ブルジョアジーの戦略的政治攻勢を形成している。また再度の円高に押されて独占大企業が多国籍企業化を急激に進めているなかで、九五年には産業空洞化リストラ合理化のいっそう大きな波が労働者大衆をおそうであろうことも必至である。

## 戦後50年を撃つ政治闘争

こうした国内外の情勢を見すえながら、われわれは九五年の党活動を次の三點を重点において推進する。そしてすべての先進的労働者人民が、このたたかいのもとに結集するよう呼びかける。

第一には九五年政治闘争のもつ重要な位置を明らかにしながら、九五年闘争の中軸として、日本帝国主義に対する政治闘争を全力をあげて組織することである。

社会党の解党的状況が深まるなかで、戦後日本階級闘争の様相を大きく規定してきた社会党一総評ブロック下での反戦平和闘争と戦闘的経済闘争もまた最終的に解体しつつある。すでに総評は連合へと成長・発展し、総評下の戦闘的労働組合運動は連合下の労資協調路線へと解体・吸収されていった。そして社会党が昨年九月の臨時党大会でこれまでの基本政策を全面的に転換し、自衛隊合憲・日米安保堅持などをうちだして「護憲の党」の看板をみずからおろすなかで、社会党一総評のもとでの反戦平和闘争もついに最終的に幕が引かれることになった。それはまた社会党一総評ブロックの基盤のうえで、その左派反対派としての位置を占め続けてきた日本新左翼運動の旧来の存立基盤をも消滅させることになった。そしてある部分は護憲新党運動の尻尾にくつづいて社会党の再建を夢想したり、またある部分は社会党が労働組合に基盤をおいてきたことを右翼的に批判しつつ、市民運動内の良識派に変身しようとしているのである。

戦闘的経済闘争と対をなす戦後反戦平和運動の終えんは、これに結集し、これを支え続けてきた日本の労働者階級人民の経済状態の大きな変化、そしてそれとともにう意識状況の急速な変化に大きく規定されたものである。わが国の労働者人民の大半は、戦後日本資本主義の急速で大規模な成長のなかで飢えの危機から解放さ

れるとともに、その意識のうえでは中流階級化

した。国民の約八割が自分を中心階層に属していると思っているという状況が、六〇年代半ばから続いている。社会党の新保守政党化もまた、こうした状況に規定されて進行したのである。

したがってこのようないくまで護憲新党に乗り移って改革を問題にしないままでは、護憲新党に乗り移っていくことは再度の敗北を結果するだけであり、また市民運動へのくらがえはより右翼的な非階級的運動を尻押しすることに結果するのである。

問われているのは政治闘争をその政治的・階級的基礎から再建していくことである。すなわち戦後反戦平和運動を内容的に支えた一国的平和主義に代わる新しい大衆的な政治闘争内容を確立することであり、また政治闘争を支える階級基盤そのものを再構築していくことである。

戦後反戦平和運動のなかで、行き場を失いながらなお闘争に立ち上がるうとする人々と原則的批判関係を切り結びつつ、日帝の帝国主義としての成長のなかで不可避に増大する労働者階級の相対的下層部分、レーニンいうところの「真の大衆」に階級基盤をすえ直しながら、国際主義を基軸においていた政治闘争の再建へと踏み出していくべきなのである。

九五年、われわれはアジアのたたかう諸団体を結集して、日米帝国主義のアジア支配とたたかうアジア人民連帶集会とアジア国際会議を成功させるために全力をあげる。九二年一〇月国際会議においてアジア・キャンペーン(AWC)運動の開始が決議され、その後AWC運動は年二回のアジア共同行動を積み重ねながら着実な前進をかちとってきた。そしてこの成果のうえに、九五年秋に日本の國連常任理事国入り反対等を掲げてアジアのたたかう諸団体による国際会議と国際連帶集会が開催されようとしている。われわれは九五年国際会議・国際連帶集会の成功を最大限追求するとともに、これを前後する過程を通じて、アジアの労働者・農民・被抑圧人民を基盤にしたアジア規模の統一戦線、反帝アジア人民政治統一戦線と、国内における反戦平和運動の終えんを乗り越える反日帝国主義プロレタリア政治統一戦線を形成していくために力をつくさなければならない。

## 階級的労働運動の建設を

第一には、労働者階級下層に陣地を築き、階級的労働運動の再建をかちとていくことである。

いうまもなく共産主義運動にとって、労働運動の戦場は、他の人民闘争の諸戦場に代替することのできない重要な位置をもつていて。われわれはプロレタリア社会主義革命の実現を当面

の目標においている。この革命の主力はプロレタリア階級であり、プロレタリアートを組織し彼らを革命の指導階級として形成していくことは党にとってもっとも基礎的な活動となる。われわれはプロレタリアートのなかにおいて多数派とならねばならない。労働者階級多数の獲得をめざし、彼らの多数を実際に党の影響下に、党のまわりに結集させるための組織的能力を獲得し強化するために党は努力し続けなければならない。

労働者大衆が最初に握りしめる武器は階級の第一次団結体としての労働組合であり、彼らは労働組合に団結し、経済闘争を通じて必ずしも労働者階級の一員であることを自覚する。党は労働組合の大衆に対して、雇主との闘争によっては労働者大衆の状態の根本的改善はありえず、資本主義的搾取制度そのものに対する闘争から自己を解放できることを明らかにし、組織と団結のみが彼らの唯一の武器であることを教える。こうした党の労働組合指導の全体性を保障し、労働者大衆を革命的階級へと形成していくために不可欠な指導の戦術が政治闘争と経済闘争の結合であり、党による政治闘争への不断なる持ち込みと、労働者大衆の政治闘争への不斷なるいざないである。

このような観点に立ちつつ、われわれはわが国の労働運動を取り巻く諸困難に立ち向かい、階級的な内実をもつ労働運動の再建と構築に向けて九五年をたたかいぬかねばならない。われわれが踏まえておくべき事態の一つは、労組組織率の継続的な低下(九三年一二四・二%)にもあらわれているように、労働組合運動の停滞状況が広がり、膨大な労働者が未組織・無権利の状態のまま放置されていることである。プロレタリア階級闘争の大衆的基盤となるべき労働組合に組織していく、もつとも初步的な活動を含めて、共産主義者が労働者の「護民官」としてその前衛を引き受けるべき状況が拡大しているのである。

われわれが踏まえておくべきもう一つの事態は、帝國主義段階における労働者階級の上層と下層との分裂という状況がわが国においても急速に拡大し始めているということである。これは資本主義・帝國主義の発展がもたらす必然的な結果である。労働者階級の上層と下層への分裂は、わが国の多国籍企業の成長と並行して本格的に始まった。そしてそれは八〇年代を通じて拡大し、バブル経済とその崩壊、世界同時不況への突入という過程を通じてさらに促進されていった。八〇年代末、労資協調路線に立つ評労働運動が隆盛であった時代には労働者内の

階層分化は未発展であり、総評は大企業と中小零細企業の労働者の双方を含む組織でありえた。かつての総評に比べ連合の階級的性格には一片のあいまいさもない。連合は上層プロレタリアートの利益を代表する組織である。そしてその運動路線は必然的に労資協調路線となるのである。上層労働者もまたその本質は資本制搾取制度にしばられた賃金奴隸である。しかし、帝国主義の超過利潤によって買収され、一定の安定的な生活を保障しているわが国の上層労働者の多くは、現状においては現資本主義社会の変革ではなくその安定と繁榮を強く望んでおり、その点から彼らは連合の指導部と路線を基本的に支持している。

連合の内部において、反動的指導部の反労働者性を暴露し、労働者大衆に対する搾取の強化とたたかい、良心的な部分を階級としてめざめさせていくといったような原則的活動は決して放棄されるべきではない。また連合内労組といつても中央はともかく、地方・支部レベルでは教組や自治労など、現に原則的な労働組合運動を開拓している労組も全国に数多く存在している。階級的労働運動の再建をめざすわれわれの活動の基本は「連合内外を貫いて」でなければならぬ。しかし賃金奴隸制の廃絶をめざす階級闘争の一部としての階級的労働運動の建設、そして階級的労働組合の獲得を問題にするならば、連合内部での活動は實際上は副軸にとどまるであろう。われわれは、帝国主義そのもののうちに物質的基盤をもち、帝国主義の洗練された労働者支配機構であり、上層労働者の利益代表である連合そのものを階級的労働運動の直接の主なる基盤とすることはできない。この点もまた総評運動が強大であった時代、総評を基盤

にして階級的労働運動の展望を語りえた時代と現在の状況は根本的に異なっている。階級的労働運動の基盤は、労働者階級の上層と下層とへの分裂の拡大という事態を踏まえて、上層労働者の利益代表組織である連合とは別個に展望されねばならない。階級的労働運動は、わが国の分散し孤立させられた労働者階級の相対的下層に依拠した運動として、はじめて次の時代を切り開いていくことができるであろう。

また下層労働者の組織化をめぐる闘争は、排

外主義との闘争の一環であり、労働者階級を国際主義のもとに組織していくたかいの一環でもある。生活の困窮、失業、将来への失望という下層労働者の不満や怒りは、共産主義運動の側の働きかけがなければ、他民族の労働者の排斥に不満のはけ口を求める排外主義や、擬制的反体制運動としてのファシズム運動に組織される。これは過去の問題ではなく現在の問題である。ドイツやイタリアなど西欧諸国であらわれている青年層を中心とした民族排外主義、ファシズム運動の台頭は何よりもそのことを物語っている。

さらにわれわれは、日本の多国籍企業の活動の拡大、国内産業の大再編とその空洞化のなかで不可避に増大する新しい労働者下層・低賃金労働者・不安定雇用労働者・失業者等のなかに、アジア諸国を中心とした多くの外国人労働者が存在していることをあらためて重視しておかねばならない。その大半が劣悪な労働条件下で搾取される合法「非合法」のアジア・第三世界の滯日外国人労働者の生活と権利を守るたたかいは、彼らにとって必要であるばかりでなく、またそれ以上に日本人労働者にとって必要であり重要である。日本人労働者が排外主義とたたか

九五年の階級攻防関係は労働運動のなかにも鋭く反映される。日帝ブルジョアジーによる戦後政治の総決算、保守二大政党制への政党再編、このもとへの連合を中心とした労働運動の統合という攻撃が強まるなかで、これに対峙し、国際主義で武装した階級的労働運動の強固な隊伍を登場させるためにわれわれは先進的な労働者たちとともに奮闘しなければならない。そして全労協や全国の階級的な労働組合、あるいは諸労組地域共同闘体の内部でのわれわれ共産主義者の活動の成果を、階級的労働運動の再建と発展に結実させていかなければならない。

## 前衛党建設における諸課題

最後に第三として、今後、長期にわたる持久戦の一時代に耐えつつ、着実に階級を組織し続ける革命党、プロレタリアートの前衛組織の建設をこの九五年にこそ総力をあげて前進させていくことである。

プロレタリア世界革命の司令部としての世界党を再建する歴史的事業の一翼を担い、アジア共産主義運動の前衛的役割を果たしていく党－これがわれわれが獲得すべき党の国際的性格である。日本の共産主義運動に伝統的につきまとってきた実際上の一国主義的限界を克服し、国際的に要求されるレベルに耐えうるものへと党を理論的・組織的に高めあげていかねばならない。この点で、このかん進めてきた外国の諸党との討議関係、相互支援関係を継続し、発展させていくことは重要である。アジアに焦点をあ

てていれば、現在、政権を獲得し一九九〇年の民主化闘争の地平をさらにおしあげようとしているネパール人民とその指導党派、あるいは敵階級の新たな攻撃の開始のなかで階級闘争と共産主義運動の飛躍をかちとろうとするフィリピン人、その指導党派、あるいは台湾、韓国、インド、バングラデシュなどの東アジア・南アジアの人民とその指導党派との連帯関係の強化をはかっていくことは、アジア諸国を縦横に貫いて全アジア人民政治闘争を組織していくというわれわれの構想を具体化していくうえでも不可欠である。日帝の対外侵出の速度に遅れをとることなく、アジア人民共同の政治的反撃をいつでも組織できる準備を進めていかねばならない。そしてこうした国際共同の闘争とともに組織するなかで、アジアの共産主義者間の原則的連帶関係と団結の再建をめざさねばならない。

われわれはまた、わが国の労働者階級の現在と未来にわたる真の階級的利益に立脚し、労働者階級の下層に陣地を築き、日本帝国主義打倒の日本革命の勝利を準備する党の建設を進めな

い、国際主義に目覚めていくうえでそれは大きな意義をもっている。経済の国際化といわれる状況において、日本人労働者と外国人労働者の団結を阻害する溝が深く両者のあいだに横たわっている。まず賃金・労働条件の大きな格差が、そして何よりも島国日本社会に根強く存在し拡大再生産され、労働者の階級意識をくもらせている日本人労働者の側の第三世界蔑視と民族排外主義が両者の団結を阻害している。日本労働者の利益代表組織は、国境の外側で引き起こされる事態（侵略・戦争・支配…）に対してだけではなく、国境の内側で外国人労働者をとりまいりにかけられるのである。日本の先進的労組活動家は、外国人労働者をみずから労働組合のうちに迎え入れ、彼らとともに彼らの生活と権利を守るためにたたかいぬかねばならない。

九五年の階級攻防関係は労働運動のなかにも鋭く反映される。日帝ブルジョアジーによる戦後政治の総決算、保守二大政党制への政党再編、このもとへの連合を中心とした労働運動の統合という攻撃が強まるなかで、これに対峙し、国際主義で武装した階級的労働運動の強固な隊伍を登場させるためにわれわれは先進的な労働者たちとともに奮闘しなければならない。そして全労協や全国の階級的な労働組合、あるいは諸労組地域共同闘体の内部でのわれわれ共産主義者の活動の成果を、階級的労働運動の再建と発展に結実させていかなければならない。

ければならない。階級闘争の勝利は党建設の前進にこそかかっている。これは社会主義が世界的規模で実現され、階級が廃絶され、階級闘争が消滅するその最後の一日前まで真理であり続ける。今日、党を理論や運動のサークルに変え、あるいは労働運動や市民運動の世話役組織に変えようとする種々の潮流がばつこしている。スターリン主義は死んだ、だから前衛党も無用になつたと、彼らは異口同音に主張している。彼らのうちの少くない部分は、階級支配の打倒や政治権力の獲得をめざす運動はもはや時代運れになつたとして、資本主義社会内部で「対抗社会・対抗文化」を形成していくことを一つの革命戦略として語り、そのためのネットワーク型組織や共同戦線の必要を前衛党組織に對置して主張している。それは、マルクス以来の共産主義運動においてさんざん批判され続けてきた、政治革命ぬきに社会の改造を夢想するという、かくしてブルジョアジーの共産主義敗北論の宣伝に呼応して、これまでのどの時期よりも大

規模な解党主義の大合唱が行われている。このような時代、マルクス・レーニン主義を掲げ、レーニン主義党＝中央集権非合法党への結集を労働者大衆に向かって訴え続け、一人でも多くはだかっている。当面、このような状況は大きく変化することはなく、むしろ共産主義運動をとりまく困難はもっと巨大になっていくことを覚悟せねばならない。しかしわれわれはプロレタリアートの前衛組織の建設を決して放棄しない。党建設のための共産主義活動は、どのような困難な環境のもとでも必ずやりぬかねばならない。われわれに必要なのは、新しい困難な時代に適応する組織活動をつくりだしていくことである。

われわれは現実の階級矛盾、抑圧と支配、ブルジョアジーの悪政に対し、大衆の先頭に立つたかうの氣風を枯渇させず、打ち鍛え続けることに引き続き努力しなければならない。それは一般的に必要というのではなく、今までの何倍もこれからは必要とされるのである。

敵階級に対する戦闘性を党が失えば、党の前衛性は瓦解する。そして党を思想集団や思想的共同体とするような誤った組織路線に道を譲ることにもなる。同時に、共産主義者の党は戦闘性のみを誇りとする急進民主主義者の党とは決定的に異なることをわれわれは一瞬たりとも忘れてはならない。急進民主主義者たちが政府に対する戦術的前衛として人民の現実の利益を一部しか代表できないのにに対して、共産主義者は「労働者階級の直接正面する目的と利益とを達成するためにたかうが、しかし、現在の運動のなかにあって、同時に運動の未来を代表する」（『共産党宣言』）のである。われわれはプロレタリアートの経済的解放＝共産主義という階級の未来の利益のために、その生涯を生き抜こうとする革命的大衆を獲得し、彼らを党に結集させるためにこそ、現実の大衆の先頭に立ってたかうのである。だから何よりもわれわれは、党の革命的綱領＝総路線を大衆のたたかいの内部に持ち込み、大衆の心にしみいるような言葉でこれを訴えていくような活動にもっと習熟する必要がある。それは新しい時代のなかで、飛躍的に強化されなければならない。

持久戦時代における党建設の前進はいかにして可能となるのか。党に結集する共産主義者の不断なる自己変革と團結を基礎にしてである。党の團結こそ、党を防衛し、党を変革し、党に力を与える最高の武器である。わが党はその組織原則が党内民主主義に支えられた中央集権主義にあることを明らかにしながら、党員の團結の重要性を党規約において次のように確認してきた。「党員は平等であり、野戦軍の規律と



国会前でハンストをする韓国の元「従軍慰安婦」の人々(94年9月)

アジア人民と連帯し 95年闘争へ!

もに、いかなる場合も助け合う義務がある。私生活と組織的團結との対立とたたかい、同志的批判と援助を組織し、自己を共産主義者として建設し続ける」（規約第二条第五項）。強大なブルジョアジーに対する闘争を再び新たな時代の到来のなかで開始しようとするとき、ここに示された党建設の基本に踏まえ、これを発展させていくことの意義はきわめて大きいのである。さてこの項の提起を終わるにあたって、いくつかの重要な党建設上の課題について付け加えておく。

その一つは、原則的党派闘争と党派間共闘の推進である。政治闘争や学生運動の領域において、われわれは複数の党派とのゆるやかな、あるいは緊密な党派間共闘をこれまで組織してきた。原則的党派闘争関係を内包した党派間共闘は、今後の一時代においてますます必要となる。

それは先進的な諸運動の、そして先進的な労働者・学生の要求もある。われわれは論争と競合と協力を通じて原則的党派間共闘を発展させ、

階級闘争の要請に応えていく。

二つ目は、学生運動における党建設のさらなる推進である。学生運動はいまなお諸階級層の諸運動のなかにおいて特別に重要な位置を占めている。われわれはこのかん党的学生運動指導基調を明らかにするとともに、運動と組織における一定の前進をかちとってきた。ここで強調しておくべきことは、学生運動の前進を引き続きたおし進めつつ、その内部から学生共産主義者を輩出し続け、彼らを党的カーデルへと育成していくことの重要性である。党建設の将来は学生運動における党員建設の強固な再生産構造を確立することに大きくかかっているといつても決して過言ではない。

三つ目は、革命の伝導路としてのわが労働者政治委員会（労政）建設の強化である。新たな

「何が起こるかわからない」といわれる激動の一時代に生きることを、われわれは大きな喜びとする。それは情勢が混沌とし、世界が無政府的な動乱のうちに揺れ動いていくことを期待するような心情からではもちろんない。われわれはこの激動の時代の内部から、この歴史的一矛盾を止揚する物質的諸条件と、その諸条件を利用してこの世界を変革する主体と実践が必ずや生まれてくるであろうことを確信するのである。そしてわれわれもまた、そのような世界的変革運動の一部分であることを無上の喜びと感じるのである。

世界が歴史的転機に立つ一九九五年を、全世界のプロレタリアートとともにたたかいに立とう。この世界の危機を救い、新たな解放された世界を創造できるのは、ただ共産主義運動のみである。わが国の中産主義者と革命的プロレタリアートは一九九五年を、党建設と政治闘争の大飛躍の年として戦取しよう。



アジア・太平洋戦争の全面開戦日の12月8日、防衛庁に対する抗議闘争が展開された

### 共同の戦線の形成めざし

全国でかちとられた一二月アジア共同行動の成果を引きつき、九五年の敗戦五〇周年をテコとした日帝の国際的突出、とりわけ国連安保理常任理事国入りに対する反対闘争を全力で組織しよう。敗戦五〇周年をめぐる「国論」を二分するような全面的な政治的攻防戦に打ってどう。AWCは九五年秋、日米帝国主義のアジア第三世界支配に反対するアジア国際会議の開催を予定している。日米帝国主義のアジア第三世界支配の強化に対するアジア諸国共同の反撃を開始するとともに、これと結合する日本の労働者階級自身の政治闘争を前進させよう。

一二月アジア共同行動が、フィリピンからKMU(五月一日運動・労働運動センター)の代表を迎えて全国で組織された。今回のアジア共同行動は、一二月三日の愛知を出発点にして、四日には、福岡、沖縄、六日大阪、七日京都、八日東京、一一日広島と、全国七カ所で開催された。また、これに連動して先進的学生たちは、関西大学で関西学生集会を開催し、八日には東京で全国学生の独自集会を開催した(詳細は各地報告)。

アジア共同行動は、九年、アジア一二カ国・地域の大衆組織の参加で開催された「日米軍事同盟と自衛隊の海外派兵に反対する一〇月国際会議」で発足したAWC(日米軍事同盟と自衛隊の海外派兵に反対するアジア・キャンペーン)が、日帝のアジア侵略戦争への全面的突入日であつた一二月八日と、自衛隊の海外派兵法案が成立した六月一五日をメモリアルデーとして、アジア諸国で反日米帝国主義の共同行動を意識

的に作り上げていこうと提起したものであった。これに応えて日本では、六月と一二月にアジア共同行動が毎年全国で開催されてきた。今回それは通算で五回目となる。

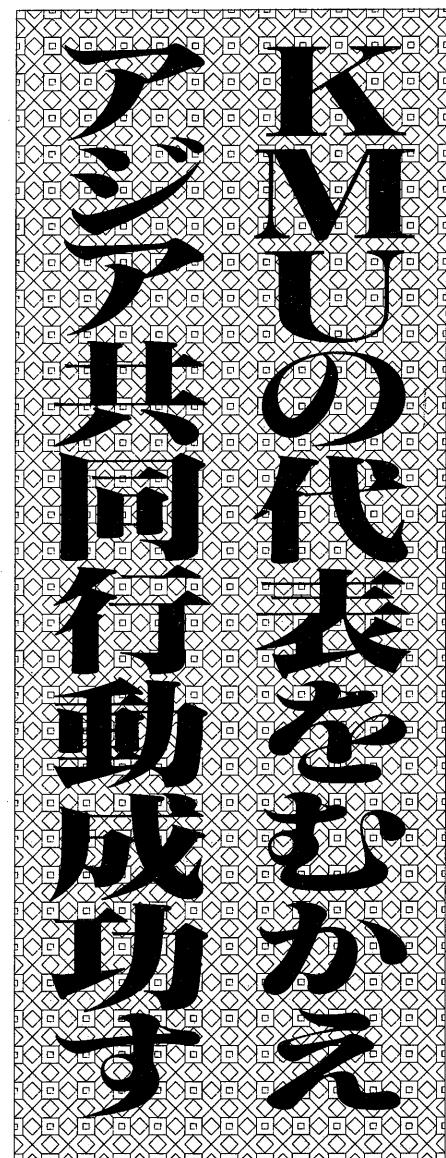
### アジア国際会議の成功を

今回のアジア共同行動の意義の第一は、九五年的敗戦五〇周年をバネに戦争責任を最後的に清算しようとする日帝の策動、そして国連安保理常任理事国入りを中心とする日帝の国際的突出に対する反撃戦としてたたかいとられたことにある。日帝・村山政権は、アジア民衆の戦後補償要求に対して、元「軍隊慰安婦」問題と他の戦後補償問題とを分断し、かつ、決死の告発に立ち上がった元「軍隊慰安婦」に対して見舞金構想――いくばくかの金銭で懐柔しようという侮蔑的な方策を進めようとしている。日帝の過去と現在のアジア侵略を弾劾し続ける元「軍隊

慰安婦」の決起に連帯し、さらに、かつての侵略戦争を居直り、ふたたびアジア第三世界を自己の経済圏へと編成し、国連安保理常任理事国入りによって帝国主義としての決定的な国際的位置を確保しようとしている日帝に対するアジア民衆の決起に連帯し、彼らとの共同のたたかいを作りだしていく一環として、今回のアジア共同行動はたたかいとられた。またそれは、東京での防衛庁闘争をはじめ、日帝が主導するアジア集団安保構想の一環である防衛庁主催のアジア太平洋安保セミナーに抗議する唯一の直接行動としても組織されたのである。

今回のアジア共同行動の第二の意義は、全国でアジア共同行動を推進する大衆的な政治統一戦線の発展としてたたかいとられたことにある。日帝の国際的突出に対応した国内における二大保守政党制とこのもとでの改憲攻撃などに反対し、二大保守政党制のもとにおける新たな政治闘争のための共同の戦線を形成するたたかいとしてそれは全国でたたかわれたのである。二大保守政党制のもとにおける新たな政治闘争は、日帝のアジア第三世界支配と闘争するアジア諸国との階級闘争と結合したものとして生み出されなければならない。これを確信する全国の先进的労働者の手によって今回のアジア共同行動はたたかいとられた。これをさらに発展させねばならない。

# 12月



### 全国7カ所

# 首都圏で各種の取り組み

首都圏における一二月アジア共同行動は、「許すな、安保理常任理事国入りとアジア集団安保構想! おこなえ、眞の戦後補償を!」自衛隊の海外派兵を許さない「一二・八アジア共同行動実行委員会」によってたたかわれた。この一二・八アジア共同行動実行委員会は、新党護憲リベラルの斎藤正敏参院議員や國弘正雄参院議員、また斎藤一雄前衆院議員、小峰雄藏さん、中岡基明全国一般全國協委員長など五人の呼びかけ人のもとで、全労協、全国一般全國協、東水労青年部など首都圏のたたかう労働組合や、沖縄・一坪反戦地主会関東ブロック、天野恵一さん、福富節男さん、吉川勇一さんなど市民運動・住民運動の広範な参加・賛同をもって組織されたものである。そしてこの実行委員会のもとで、一二・二五プレ企画、一二・八防衛厅抗議行動とアジア人民連帯集会が取り組まれた。

12・8  
防衛厅抗議闘争

## 安保セミナーに 反対し集会デモ

一二月八日、首都圏のアジア共同行動実行委は、関西、九州・山口の仲間を迎えるには防衛厅抗議行動を夜にはアジア人民連帯集会をたしかった。

午後二時三〇分、約九〇人の労働者・学生・市民が結集した防衛厅裏の桜町公園において、一二月一日からはじまった防衛厅主催のアジア太平洋安保セミナーに反対する抗議集会が開催された。集会場は集会参加者を上回る数の、これまでを倍する私服公安刑事によって取り囲まれた。日帝は彼らの野望を粉碎しようとするたたかいに重警備体制を敷いてきたのだ。

全体の防衛厅抗議行動に先立つて、関西・西日本からも合流して全国のたなかう学生たちによる前段学生集会が約四〇人の参加者によってたたかいつられた。この若き闘士たちの熱気を引きついで、全体集会の司会を担当したJPM'90首都圏連絡会のメンバーであり連合の職場支配策動や国鉄闘争をたたかう自治体労働者から集会の開始がつけられた。司会の決意に満ちたあいさつについて、



▲プレ企画の11・25学習講演会(東京)

アジア共同行動実行委を代表して前衆議院議員の斎藤一雄さんが発言した。斎藤さんは一二月八日の日米開戦によってアジア侵略戦争が全面化した歴史を再びくり返さないという決意を表明し、現在のルワンダ派兵、

表してJPM'90世話人の小城さんが、一年前の六月十五日、斎藤議員がここでの集会で自衛隊法改悪に社会党全體で反対していると話していたが、現在では邦人救出の名目で自衛隊機を海外へ派兵する自衛隊法改悪を村山社会党が率先して進めたように情勢は激変したことを指摘し、かつてもいまも同じ邦人救出の名目で進められた。斎藤さんは一二月八日の日米開戦によってアジア侵略戦争をアジア人民

と連帯して断固阻止しようと呼びかけた。また九州・山口から代表派遣が行われた。

その後、デモ隊は、青山公園まで

保守一大政党支配へ向かう状況と連合による労働者支配が、大政翼賛会と産業報国会が結成されて侵略戦争へと突入した当時の情勢とまったく同じであると語り、平和憲法を守り、日本の政治事事大國化とたたかうアジア共同行動を断固推進しようと訴えた。つぎに集会に参加できなくなつた斎藤正敏参院議員からのメッセージー

ジが読みあげられた。さらに全国一般全國協と神奈川地連、自立労連タカラブネ労組埼玉支部、東水労青年女性部から職場のたたかいで反戦平和の政治闘争を結びつけ、敗戦五〇年を迎えてこれまでの運動の総括をかけてたたかいで抜くとの決意表明がそれぞれなされた。そして関西を代表してJPM'90世話人の小城さんが、一年前に六月十五日、斎藤議員がこの集会で自衛隊法改悪に社会党全體で反対していると話していたが、現在では邦人救出の名目で自衛隊機を海外へ派兵する自衛隊法改悪を村山社会党が率先して進めたように情勢は激変したことを指摘し、かつてもいまも同じ邦人救出の名目で進められた。斎藤さんは一二月八日の日米開戦によってアジア侵略戦争をアジア人民と連帯して断固阻止しようと呼びかけた。また九州・山口から代表派遣が行われた。

正門前で申し入れ

デモの先頭には斎藤さん、小城さん、白松さん、中岡さんが「自衛隊海外派兵阻止・常任理事国入り阻止・アジア太平洋安保セミナー反対!」を持って立ち、デモ隊はそのまま防衛厅正門に突入し抗議行動を開いた。正門前で中岡さんから、「①アジア太平洋安全保障セミナーをただちに取り止めること。アジア集団安保機構創設への動きを一切中止すること②自衛隊の海外派兵をおこなわないこと③AWACS、大型輸送艦・機導入など軍備増強と、沖縄・P3C送信基地建設などの自衛隊基地強化を中止すること④日米安保条約を廃棄し、米軍基地を撤去すること」という要求をかかげた抗議文が読み上げられ、玉沢防衛厅長官への申し入れが行われた。

で参加した白松さんは、アジア共同行動こそ、日本人民の唯一の進路であることを熱烈に訴え、九州・山口のすべてのたたかいでアジア共同行動に合流させるべく奮闘してかちとられた一二・四九州・山口集会の成功を報告した。また首都圏の学生、および関西の学生からたたかいで決意を受け、全体で防衛厅への抗議文を確認しシナプスヒコールをあげテモヘと移った。

四・五キロの道のりを元気よく進んだ。小春日和の一二月八日午後、青空のもとでアジア共同行動のデモ隊は終始戦闘的にならなかった。アジアは終始戦闘的にならなかった。アジア安保機構の創設を許さず、国連安保理常任理事国入りを阻止すべく、

自衛隊海外派兵に反対し、眞の戦後補償をたたかいとるべく、日米帝国主義とたたかうアジア各国民の国際共同闘争の炎が日帝の中枢・首都圏で燃え上がった。

## 東京でアジア人民連帯集会

国連安保理常任理事国入り反対!

アジア人民連帯集会は、南部労政会館に約一五〇人を集め緊張感をもつてはじまつた。全国一般全国協の南波さんと東京交通労組の鶴居さんの司会によって集会は運営された。

内田雅敏さんが講演

アジア共同行動実行委を代表して小峰雄志さんから次のようなあいさつを受けた。「来年七〇歳になる私にとって、一二・八と八・一五は忘れられない日。敗戦から五〇年、戦後の反戦平和運動を懸命に担つてき

たが、実は大事な視座を失つてきたのではないか。一つは天皇の戦争責任の追求をあいまいにしたこと。今日続発する閣僚の『侵略戦争ではなかつた』発言は、そこに根っこをもつている。二つめには、アジア人民との共同連帯の運動をやつてこなしたこと。本日の集会が打ち出した國連常任理事国入りとアジア人民連帯は大きな意義がある。来年はこれから日本の運動の分水嶺になる。

強大な共同行動がつくれるかどうかが問題だ。もう一つ、民衆の共同行動とあわせて政治の共同行動を提起したい。さまざまな護憲新党の動きがあるが、共同戦線的政治結集体、護憲平和アジア連帯勢力の形成へ向かっていこう。次にAWC共同代表の小城さんから「五回目のアジア共同行動を全国七カ所でたたかう」と社会党の首相が誕生したが、自民党より悪い。村山政権はアジアの集団安保機構の創設へ向かっている。前戦で日本は、海外権益を守れと叫んでアジア二〇〇〇万の民衆を殺した。戦後補償も日本は經濟侵略へすり替えた。戦後五〇年、報道されている愛媛県議会の決議のように、かつての戦争を賛美するような運動の推進が全国でねらわれている。アジアでは民衆のたたかいが前進して

いる。ネバールの仲間は、政権の座についた。これからが大変だ。命がけでたたかう人々とともにたたかい抜く。AWCは来年一〇月二度目の国際会議をもつて、たたかいをつくりていく。全国の皆さん協力を」との訴えが行われた。

メイン講演は弁護士の内田雅敏さんから受けた。「戦後補償裁判は全國に二〇数件あるが、一件も解決されていない。政府の戦後処理問題の発言が多少変わってきても、裁判で起しきれなかったこと、この限界を超突破する試みがようやくはじまつてゐると述べ、九五年を政治決戦としてたたかうようアピールした。

トナム反戦運動が戦後補償問題を提起しきれなかったこと、この限界を超突破する試みがようやくはじまつてゐると述べ、九五年を政治決戦としてたたかうようアピールした。

社会党が社会主義を否定したことを英字新聞で知ったと述べ、フィリピンでもこういう勢力がいること、それが大衆運動のなかで米帝・ラモスの欺まん的改良政策に屈伏していると指摘した。最後にAWCは日本政府とたたかう政治勢力を結集するステップであると評価し、資本主義帝国主義にとつて代わる眞の社会主義のたたかいを前進させようと呼びかけた。特別アピールとして発言した韓統連の代表は、「元慰安婦」の断食闘争に日本政府が冷淡な対応をと

つたこと、在韓被爆者から「戦犯でなかつたといえる日本人の被爆者がいたといふ人いるのか」という重い突きつけがあつたこと、あるいはチマヨゴリ事件などを取り上げて問題提起し、日清戦争以後百年の歴史をとらえ直し、ともに歴史を作り変えていこうと訴えた。

## フレ企画で學習講演会

11・25

東京

――常任理事国入り戦後補償問題を共同行動がかかる主要政治課題について学習することを目的としたものであった。最初に、主催の実行委員会で約七〇人が参加して開

の国の態度は変わらない。政府が少々変わつても官僚が変わらない見本だ。安保理常任入りのための戦後補償という政府の方向ではふたたび同じ誤りをくり返す。戦後補償問題は自衛隊海外派兵とメダルの表裏だ」

「戦後平和憲法の反戦平和運動は悲惨な戦争にまきこまれるな」といふお守り札ではなかつたか。そこには戦後の護憲運動の怠慢さがある。

自衛隊海外派兵とメダルの表裏だ」ジア人民の苦しみの始まり。この侵權戦争の苦しみは現在まで続いている。従軍慰安婦、ジャパニン・バヤンの代理事務局のフィリピン・バヤンの代表は、「一九四一年一月八日はアーリーは今も続いている。小さな魚が集まって相談し、皆で大きな魚の形をつくって、悪い大きな魚を払つた。われわれもこのように進むとアピールし、日本帝国主義の支配にアジア人民の連帯と团结で立ち向かおうと訴えた。最後に集会のまとめを行つた中岡さんは、行動提

出として、第一に眞の戦後補償を要求する意見広告を世界各国の新聞に掲載する運動に協力すること、第二に敗戦五〇年の九五年秋、日本の安保理常任理事国入りを阻止する第二回アジア国際会議・アジア人民連帯集会を準備していくことを提起した。

こうして一二・八アジア人民連帯集会は成功のうちに終わつた。首都圏の一二・八アジア共同行動は、全国一般全国協などたたかう労働組合、市民運動を担う人々、学生運動、さらには護憲新党でたたかう人々など広範な諸層が参加・賛同し、大きな成功をおさめた。それは日本の政治状況が保守一大政党時代へ突入し、自衛隊海外派兵や憲法改悪の全面攻撃が始まつて人民の政治意識が大きくなればならない。

流动し、広範な人民が抵抗と反撃の統一戦線・共同戦線を自然発生的に要求しはじめるなかで、その一部を結集したたかいたとしてあつた。そして一二・八闘争は、アジア共同行動の意義に目ざめはじめ、今後の闘争の展望をこのなかに求めようとする先進的な人々を少なからず形成はじめた。たたかいはこれからである。われわれは以前にも増して、アジア共同行動の前進に寄与・奮闘しなければならない。

がれたこの集会は、一二・八アジア共同行動がかかる主要政治課題について学習することを目的としたものであつた。最初に、主催の実行委員会で約七〇人が参加して開催されたこの集会は、一二・八アジア共同行動の存在価値が問われ、村山自社政権の登場で政治が総保守化するという時代に、社会への批判精神をもつて声を上げていくことが非常に大切であり、一二・八アジア共同行動は社会の根源的問題を解決するたたかいとしてますます重要なつ

二月一日、アジア共同行動と連動し、JPM90と日本フィリピン連帶運動・東京の二団体による抗議団によって、東チモール人民の反インドネシア・民族解放闘争に連帯するインドネシア大使館抗議行動がたたかわれた。これはAWCに参加する東チモール独立革命戦線(フレティン)への緊急の国際支援行動として取り組まれた。一月中旬にインドネシアで開かれたAPEC開催中、東チモール人民はジャカルタの大天使館の中庭で座り込み、東チモール使館の中庭で座り込み、東チモール

ると表明した。

そしてフィリピンのKMU代表から発言を受けた。彼はフィリピン人の側から、アジア集団安保―日本との国連常任理事国入り、そして元軍隊慰安婦などの戦後補償問題での日本政府の態度を批判した。とくに戦後補償問題での村山政権の民間基

### 林茂夫さんら発言

つづいて発言に立った軍事評論家の林茂夫さんは、ルワンダ周辺国への自衛隊派兵と一体となつた安保理常任理事国への立候補宣言は戦後日本の大きな転換であり、それは国連を通じた自衛隊海外派兵=政治軍事大国への道につながつていると批判した。さらに彼は、ルワンダのケンブリッジの立候補宣言は、少なくとも日本は国連PKOではなく大國日本の単独派兵であり、ハイチへの米軍侵攻、グルジアへのロシア軍派兵と同一の動きであり、そうした大國中心の多国籍軍による小国への軍事侵攻の後に国連PKOが「秩序回復」と

## 12・1 東チモール人民と連帯し インドネシア大使館に抗議

### ●責任者引き出す

インドネシア大使館前には大崎署の私服が張りつき、東チモール人民の独立闘争支持をかけた行動参加者への弾圧の機会をつかっていた。抗議団は、大使館門前でシナプス大通り抗議行動がたたかいつづけると、大崎署のワゴン車も駆けつけ、私服で印度ネシア大使館に抗議の声をたたきつけねばならないのだ。



東チモールの独立を認め弾圧やめよと抗議

金構想が何ら元軍隊慰安婦の利益にならず、むしろ日帝がアジアを政治軍事支配する安保理常任理事国入りの材料として利用されていることに怒りをあらわにし、アジア第三世界人民は復活する日帝のアジア支配とたたかいつづけると表明した。

して引きついでいくという新しいやり方であると暴露した。また防問懇報告「日本の安全保障と防衛力のあり方=二一世紀にむけての展望」で出された「能動的建設的な安全保障」は「今後は能動的な秩序形成者として行動すべき」として軍事行使を積極的位置づけたものであると批判し、武力不行使の国連安保理常任理事国入りを日本政府が語っていることは大うそであることが暴かれた。またマスコミ報道でアジア諸国の支配者が日本の安保理常任理事国入りについて賛成といっていると伝えられた。金先進国だけが支持し、ほとんどのアジアおよび第三世界諸国は不支持のディリでも連日、闘争を展開した。これに対しスハルト独裁政権は、治安による弾圧をくり広げた。こうした事態への緊急行動はプロレタリア国際主義を実際に復権しようと奮闘するAWC傘下のアジア各国人民の運動にとって当然の義務であり、日本労働者人民はインドネシア支配階級とともに東チモールにおける巨大な石油資源などをねらう日帝ブルジョアジーの策動とたたかい、全力でインドネシア大使館に抗議の声をたたきつけねばならないのだ。

持であることが暴露された。そしてロ円という例をあげ、日本政府の国籍条項を楯にした差別排外主義を徹底的に批判した。また戦闘員と民間人の戦後補償政策の格差こそ、天皇を頂点にした序列化構造であり、日本の差別社会を形成するものと述べた。その上で「慰安婦」問題が提起される会」の金英姫(キムヨンヒ)さんが、「国家責任をあいまいにした

批評した。まず、八・三の村山首相談話で来年度から一〇年間で一千億円規模の「平和交流計画」の事業を展開するとしたことに対し、「國家責任と個人補償」が欠落し、なによりも元軍隊慰安婦などへの名誉回復の措置がなく、むしろ彼女らの気持ちを逆なでするものと痛烈に批判した。さらに日本の戦後補償政策における「内外格差」と「軍民格差」という根本的な問題点がとりあげられた。金さんは、内外格差の問題について、在日韓国人戦傷軍属の石さん・陳さんの補償請求が棄却され、同レベルの日本人には年間三八〇万円が支給されるが石さんたちにはゼー

ル回復」実現とそのための「日本政

府の国家責任の明確化」であり、ア

ジア民衆との将来の「共生」をつく

りだしていくことだと提起して発言

をしめくくった。

これらの発言を受けて活発な意見交換がなされた後、東チモール人民の独立闘争支持!一二・一インドネシア大使館への緊急の抗議行動がJPM90から提起された。最後に司会

より、一二・一インドネシア大使館抗議行動、一二・八防衛廳主権のア

ジア太平洋安保セミナーに反対する

抗議行動、一二・八防衛廳主権のア

ジア太平洋安保セミナーに反対する



(上)12・3愛知集会 (下)12・6大阪集会

## 12・4 沖縄集会

映画上映後  
活発な討論

一二月四日、那覇市の教育福祉社会館において、「一二・四アジアと連帶する沖縄集会」—「もうひとつの一・八一レーン・宮沢事件」を考える」が、アジアと連帶する沖縄集会実行委員会の主催で開催された。この実行委員会は、九四年六月のアジア共同行動の一環として行われた六・二三アジアと連帯する沖縄集会を契機にして形成され、その後、一〇・一五ODAを考える講演集会を開催するなど、沖縄における国際連帯運

責任者が現れた。抗議団は、これへの追求と抗議を徹底的にたたきつけ、要請文を読み上げ手渡した。最後に抗議参加者は、東チモール人民のたたかい、ならびに前進するインドネシア労働者人民のたたかいへの国際的支援行動を何度も徹底的にくり返すと大使館責任者に突きつけて緊急行動を終了した。

AWC運動の一環として行われた今回のインドネシア大使館への抗議は、元「軍隊慰安婦」を守ろうとした。しかし約半年後の抗議行動においては、彼らは要請文を受け取り、責任者も出てきて抗議の声を聞くという態度に転換

行動は、週刊誌の発禁処分をめぐるインドネシア人民闘争への連帯行動を七月一三日にたたかって以来ものであった。七月時には大使館側は固く門をしめ、カメラ、ビデオで抗議行動を監視し、軍事独裁政権の出先機関らしく異様な雰囲気で大使館を守ろうとした。しかし約半年後の抗議行動においては、彼らは要請文を受け取り、責任者も出てきて抗議の声を聞くという態度に転換

## 12・3 愛知集会

# 愛知全労協などが参加

一二月三日、名古屋市の愛知県中小企業センターで、「働く者のアジア共同行動—アジアの労働者の連帯を進め、日本の国連常任理事国入りに反対する愛知集会」が、たたかう労働組合・労働者の結集によって開催された。

集会では、最初にAWC国際事務局のチト・ペスターさんが、日米帝国主義によるアジア第三世界支配を弾劾し、これに反撃する第二回アジア国際会議の開催を提起。続いて、フィリピンのKMU代表が発言した。KMUの代表は、日本帝国主義が現在進めようとしている、フィリピンを含むアジア諸国の元「軍隊慰安婦」

のたたかいに対する「謝罪」と「見舞金」構想なるものが、眞の戦後補償ではなく日本帝国主義のアジア侵略である。

### 笹島日雇労組ら発言

若干の質疑応答の後、各団体の意見表明が行われた。笹島日雇労働組合は、滞日フィリピン人労働者とともにこの集会に結集した。滞日アジア人労働者の労働相談を数多く引き受けている 笹島日雇労働組合は、集会前にKMUとの交流会のようすを紹介するとともに、排外主義との闘争、資本との実力対峙、滞日労働組合・労働者の結集によって開催された。

KMUの代表は、日本帝国主義が現

した。インドネシアでのAPEC開催に見られたように、インドネシア支配階級は東南アジアの大団として国际的イメージアップをはかるうとしているようである。ともあれわれわれはプロレタリア国際主義を復権し、アジア各国人民の連帯と団結と一緒に行動によるたたかいを全力で前に進させる。そして、インドネシア支配階級を震え上がらせるようなたたかいを突きつけてやる。覚悟せよ！

配達級を震え上がらせるようなたたかいを突きつけてやる。覚悟せよ！

略強化と国連安理会常任理事国入りのための政治的行為であることを批判した。次に、教育労働者であるアスクの墨總一郎さんが講演。墨さんは、自衛隊の海外派兵をめぐる政府の一連の動向を批判するとともに、これらに対する違憲訴訟などを紹介しつつ、労働運動と市民運動が合流した創造的なたたかいを愛知で作りだそうと提起した。

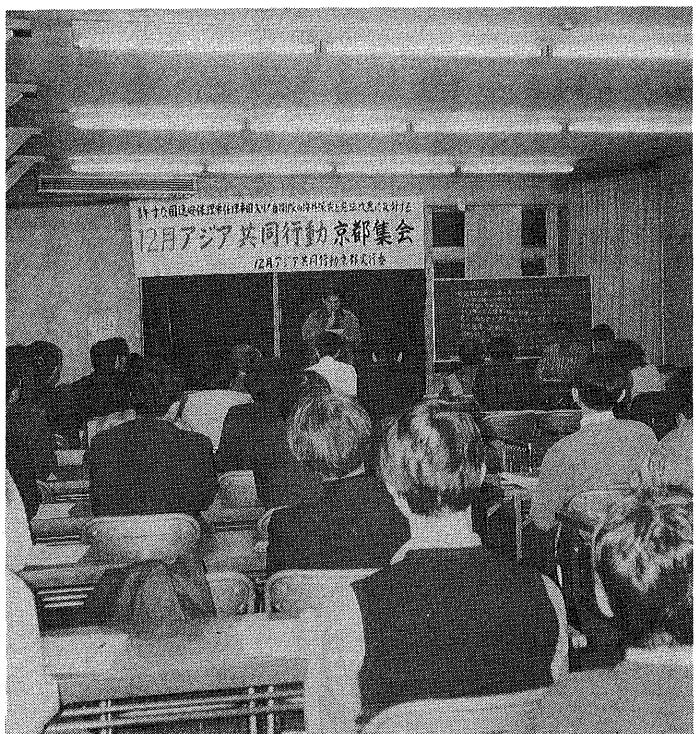
外国人労働者と日本人労働者との団結の必要を提起した。愛知労研センター代表は、日本独占資本のアジア侵略と日本型労務管理のもとでアジアの労働者が搾取されている現在、アジアの労働運動と日本の労働運動の団結とアジア共同行動の推進が急務であり、それは日本労働運動に課せられた責務であると発言。そして労研センターもアジア共同行動を総力で推進すると決意表明。愛知全労協は、アジア共同行動に今回初めて

組織決定で参加したこと、いったん組織決定したかぎりは、ともにアジア共同行動を今後、総力で推進する旨力強い決意表明を行った。自立労働組合連合タカラブネ労組中部支部は、不況下で職場を守るたたかいを報告。そして、いかに苦しくとも、アジア労働者と連帯した労働運動を今後も推進すると表明した。

集会には前記労働組合の他に、全日本建設・運輸連帯労働組合東海生コン支部の労働者や、名古屋市内で労働争議をたたかっている労働者なども参加し、今回のアジア共同行動愛知集会はたたかう労働者と労働組合の共同の集会として非常に意義あるものであった。二大保守政党制のもとで、たたかう労働運動の団結が一層強く求められている。それは、日本帝のアジア侵略の強化と国連安理会常任理事国入り策動の強化のなかで、アジアを始めとする第三世界諸國労働者との団結を作り上げていくものでなければならない。アジア共同行動・愛知集会は、そのことを、それぞれの労働組合が提起した集会であった。

アジアの労働者と連帶した労働運動・労働組合の団結と共同闘争をより強固に発展させていくとともに、市民運動も含めた愛知での共同のたたかいを今後一層強めなければならない。





12・7 京都集会

## 13団体が実行委を形成

一月七日、「許すな国連安保理

常任理事国入り・自衛隊の海外派兵と憲法改悪に反対する「二月アジア共同行動京都集会」が、京都南労働セツルメントにおいて約七〇人の結集で開催された。この京都集会は、JPM'90、洛南労組連、京都労研センター、自立労連京都地協、社青同京都地本、京大行動委員会、日米安保をつぶせ!私たちの社会をつくる会、洛南労政など三団体による実行委員会が主催したものであった。

司会のあいさつに続いて発言に立ったKMUの代表は、フィリピンにおいてWTO協定批准阻止闘争が激しくたかわれていることを報告し、KMUが公表した声明を紹介した。そして、フィリピン人民の側から日本帝のアジア侵略とたたかい、日本の国連安保理常任理事国入りを阻止す

う二月七日、「許すな国連安保理常任理事国入り・自衛隊の海外派兵と憲法改悪に反対する「二月アジア共同行動京都集会」が、京都南労働セツルメントにおいて約七〇人の結集で開催された。この京都集会は、JPM'90、洛南労組連、京都労研センター、自立労連京都地協、社青同京都地本、京大行動委員会、日米安保をつぶせ!私たちの社会をつくる会、洛南労政など三団体による実行委員会が主催したものであった。

司会のあいさつに続いて発言に立ったKMUの代表は、フィリピンにおいてWTO協定批准阻止闘争が激しくたかわれていることを報告し、KMUが公表した声明を紹介した。そして、フィリピン人民の側から日本帝のアジア侵略とたたかい、日本の国連安保理常任理事国入りを阻止す

### 同じ労働者として…

講演の後、集会は実行委員会参加団体からの発言に移った。最初に発ったKMUの代表は、野坂さんは、予測したように連合はいまや現代の産業報国会になったと厳しく批判した。そして、総評のより良い伝統を発展させるために結成された労研センターは、戦後五〇年を迎えて労働者の立場から平和の問題をたたかっていかねばならず、この集まりの場を大切にしていきたいと決意を述べた。洛南労組連の滝川さんは、未組織の組織化と争議支援、労組連の活動はつくられてきた、ことし春のフィリピンへの交流派遣団に参加するまでは国際連帯とは大変なことだと思っていたが、現地の金属労働者との交流を通して彼らも同じ労働者であることを実感した、彼らとの連帯のためには、何よりも

う二月七日、「許すな国連安保理常任理事国入り・自衛隊の海外派兵と憲法改悪に反対する「二月アジア共同行動京都集会」が、京都南労働セツルメントにおいて約七〇人の結集で開催された。この京都集会は、JPM'90、洛南労組連、京都労研センター、自立労連京都地協、社青同京都地本、京大行動委員会、日米安保をつぶせ!私たちの社会をつくる会、洛南労政など三団体による実行委員会が主催したものであった。

司会のあいさつに続いて発言に立ったKMUの代表は、フィリピンにおいてWTO協定批准阻止闘争が激しくたかわれていることを報告し、KMUが公表した声明を紹介した。そして、フィリピン人民の側から日本帝のアジア侵略とたたかい、日本の国連安保理常任理事国入りを阻止す

う二月七日、「許すな国連安保理常任理事国入り・自衛隊の海外派兵と憲法改悪に反対する「二月アジア共同行動京都集会」が、京都南労働セツルメントにおいて約七〇人の結集で開催された。この京都集会は、JPM'90、洛南労組連、京都労研センター、自立労連京都地協、社青同京都地本、京大行動委員会、日米安保をつぶせ!私たちの社会をつくる会、洛南労政など三団体による実行委員会が主催したものであった。

司会のあいさつに続いて発言に立ったKMUの代表は、野坂さんは、予測したように連合はいまや現代の産業報国会になったと厳しく批判した。そして、総評のより良い伝統を発展させるために結成された労研センターは、戦後五〇年を迎えて労働者の立場から平和の問題をたたかっていかねばならず、この集まりの場を大切にしていきたいと決意を述べた。洛南労組連の滝川さんは、未組織の組織化と争議支援、労組連の活動はつくられてきた、ことし春のフィリピンへの交流派遣団に参加するまでは国際連帯とは大変なことだと思っていたが、現地の金属労働者との交流を通して彼らも同じ労働者であることを実感した、彼らとの連帯のためには、何よりも

## 12・11 広島集会

# 県議の侵略戦争賛美発言に抗議

一二月一日、広島の福山市において「許すな、自衛隊の海外派兵!おこなえ、眞の戦後補償を!一二・一一アジア民衆の集い」が、全国でのアジア共同行動の一環として実行

委員会の主催で開催された。集会では、福山反戦市民の会から基調が提起され、続いて、森正孝さん(映画「侵略」シリーズ製作)が、「国連安保理常任理事国入りと戦争責任・戦後補償を考える」というテーマで講演。海外からは、AWC国際事務局でありバヤン国際部であるチ・ペスターさんが参加し、日米帝国主義のアジア第三世界支配の強化に反撃するアジア国際会議の開催を提起した。またこの集会では、戸田一郎広島県議会議員の侵略戦争賛美・正当化発言に抗議する緊急決議が採択された。

「戦争責任の欺瞞的決着を許すな」と題する講演が行われた。韓青同の代表は、第二次世界大戦前の日本の朝鮮侵略の歴史から話を始め、歴史的に日本がどのようなことを朝鮮半島でしてきたのかを、「従軍慰安婦」や労働者の強制徴用の事実などを例示しながら明らかにした。ついで、戦後の日本政府の戦争責任の居直りについて批判し、最後に、戦後補償問題の真の解決に向けて「政府の明

島でしてきましたのかを、「従軍慰安婦」や労働者の強制徴用の事実などを例示しながら明らかにした。ついで、戦後の日本政府の戦争責任の居直りについて批判し、最後に、戦後補償問題の真の解決に向けて「政府の明

と提案して講演をしめくくった。講演について、主催者から「日本アシア集団安保機構構想批判」と題しての提起が行われた。一二月一日から行われたアジア太平洋安保セミナーが、七月のアセアン地域フォーラムを引きつぐ形で具体化されよ

るためたたかおうと力強く呼びかけた。韓青同京都府本部は、韓国にとって来年は解放五〇年にあたるがなお南北が分断されており、かつての軍事政権と変わらない金泳三政権の弾圧がくり返されている。朝鮮半島有事には自衛隊を派兵しようとする日本政府の策動を許さず、南北統一に向けたたかうという決意を表明した。次いで仏教教授の高屋定國さんから、「日本の国連安保理常任理事国入りを批判する」と題した講演がおこなわれた。高屋さんは、ユーロスラビア留学やカンボジア視察の体験などをまじえながら、国連安保理による地域紛争への介入が逆に紛争をますます激化させていること。アメリカの言いなりになつてゐる安保理に日本が参加することは、この事態をさらに促進するものだと厳しく批判した。

この日の集会は、保守二大政党勢力と日本共産黨の双方に反対する京の集まりの場を大切にしていきたいと決意を述べた。洛南労組連の滝川さんは、未組織の組織化と争議支援、労組連の活動はつくられてきた、ことし春のフィリピンへの交流派遣団に参加するまでは国際連帯とは大変なことだと思っていたが、現地の金属労働者との交流を通して彼らも同じ労働者であることを実感した、彼らとの連帯のためには、何よりも

確な公式謝罪、個人に対する十分な補償、そして日本が軍事大国にならぬ二度と過ちをくり返さないことを内外に明らかにすること」が必要だ、と提案して講演をしめくくった。講演について、主催者から「日本アシア集団安保機構構想批判」と題しての提起が行われた。一二月一日から行われたアジア太平洋安保セミナーが、七月のアセアン地域フォーラムを引きつぐ形で具体化されよ

る日本政府の策動を許さず、南北統一に向けたたかうという決意を表明した。次いで仏教教授の高屋定國さんから、「日本の国連安保理常任理事国入りを批判する」と題した講演がおこなわれた。高屋さんは、ユーロスラビア留学やカンボジア視察の体験などをまじえながら、国連安保理による地域紛争への介入が逆に紛争をますます激化させていること。アメリカの言いなりになつてゐる安保理に日本が参加することは、この事態をさらに促進するものだと厳しく批判した。

この日の集会は、保守二大政党勢力と日本共産黨の双方に反対する京の集まりの場を大切にしていきたいと決意を述べた。洛南労組連の滝川さんは、未組織の組織化と争議支援、労組連の活動はつくられてきた、ことし春のフィリピンへの交流派遣団に参加するまでは国際連帯とは大変なことだと思っていたが、現地の金属労働者との交流を通して彼らも同じ労働者であることを実感した、彼らとの連帯のためには、何よりも

うとしているアジア太平洋地域における集団安保体制作りの一環であり、ばならないと表明した。次いで発言決して許すことのできないものだという提起が全体で確認された。

ついでAWC事務局からの発言がなされ、集会宣言と司会のまとめのなかでの「一二・八には東京で対防衛戦に決起しアジア太平洋安保セミナーを粉碎しよう」という提起を参考しての提起が行われた。一二月一日から行われたアジア太平洋安保セミナーが、七月のアセアン地域フォーラムを引きつぐ形で具体化されよ

るとしているアジア太平洋地域における集団安保体制作りの一環であり、ばならないと表明した。次いで発言決して許すことのできないものだという提起が全体で確認された。

ついでAWC事務局からの発言がなされ、集会宣言と司会のまとめのなかでの「一二・八には東京で対防衛戦に決起しアジア太平洋安保セミナーを粉碎しよう」という提起を参考しての提起が行われた。一二月一日から行われたアジア太平洋安保セミナーが、七月のアセアン地域フォーラムを引きつぐ形で具体化されよ